

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

使徒のBETA

【作者名】

新グロモント

【あらすじ】

使徒の使い魔のレイアが別世界に送り込まれたお話です。

人類の寿命が残り10年と言われる世界でレイアが人類の為に色々模索して頑張る健気なお話です。

本作品は、作者が執筆している『使徒の使い魔』の外伝っぽいお話です。

時系列で言うところの『使徒の使い魔』の最終話ちょっと前位のあたり。以前に作者が『にじファン』に投稿した物していた作品です。

完全ご都合主義

細かけえ事はいいんだよ

上記の二点が非常に大事な為、それを前提にお願い致します。

01話：プロローグ

透き通るような青空の元、完全な死を目前にしているレイアです。

「はあはあ、流石にもう限界かな…」

まさか、ゼルエルとラミエルが全力で展開したA・Tフィールドを突き破られるとはね。おかげで私は満身創痍だ。両足は吹き飛ばされて、左腕と左目も消滅した。血も流しすぎて、生きているのが不思議な状態だ。

流石は、使徒と言ったところだな。

だけど、それもそろそろ限界っぽいな。せめて、長年付き添ったラミエルだけでも無事でいてくれたら良かったのだが…。

「ラ、ラミエル…」

私の声に呼応して、ラミエルのコアが弱弱しく発光した。

そうか…お前も限界なのか。ごめんな、こんな所まで付きあわせてしまつて。段々と視界が狭くなってきた。ティファニア指輪の力で延命を図っているが、魔力がきれて年貢の納め時が来たようだ。

「は、はは…無様だな」

軽い気持ち…元の場所に帰るまでの時間つぶしで世界を救ってあげようかなと思い、陰ながら主人公sideに敵が行かないように、頑張ったというのにこの様とは笑い話もならない。

何もないだっ広い空間に私の声が響く。

「ここで死んだら、流石に蘇生してもらえないよね……………ごめんねテファ。それとアンタの邪魔をして悪かったな」

私と同じよう横たわり死にかけている青白い生物に話しかけた。
まあ、もっとも返事が返ってくることもないか。

「邪魔はしてしまったが…君も感謝してくれよ。私のA・Tフィールドが無ければ即死だったのだから…まあ、死ぬのが少し先延ばしになったただだったかね」

「……………」

青白い生物が微妙に動いているのを確認した。

ふっ、お互い無駄に丈夫だと死にづらくて困るよね。苦痛が長引くだけだしね。

「空が青いな…」

地下数百メートルからはるか上空の空を見上げた。

今頃、人類は 同じ空の下で勝利の雄叫びを 上げているのだろ
う。

そう…ここに残された私を除いて!!

……………

……………

…

ふ、ふざけるな!!

なぜ、私がこんな目に合わねばならない。

ふざけるな!!

なぜ、一番頑張った私がこんな結末を迎えなければならない。

ふざけるなあ!!

なぜ、私は人類の手によって殺されなければならない。

ふざけるなあああ!!

身勝手ではあるがあまりにも理不尽で納得する事ができなかった。
間違いなくこの場に置いて人類に一番に貢献したであろう私に対してこの仕打ち…許せるはずもない。

「死んでたまるか…はああ、貴様等にも私の味わった物を味わわせてやる!! 絶対に、ブチ殺してやる!!」

そうだ、生き残ってやる!!

例え、この身が人間でなくなろうとも最早厭わない。このままでは、生き残れる可能性は、皆無だ…しかし、可能性は低いが生き残れかもしれない策はある。

「すまない…ラミエル。私の為に…」

私をいつも支えてくれた心の友よ。君がいたから私は、いつもさび

しくは無かった。本当にすまない。

君の犠牲は、無駄にはしない!!

「死んでくれ」

ガブリ

私は、ラミエルをコアごと食らった。

これは、賭けだ。体の欠損部分をラミエルで補う。そして、失いかけている使途の力をラミエルのコアを食らい補充する。

本能が言っている…これは、足りない。

やはり、あれも食さねばならぬか…

ふふふふふ、上等だ！

「お互い、生き残る為だ共存しようぜ…BETAさんよ」

ガブリ

成功した暁には、期待しているぜ BETA。お前さんの学習能力で早いところ G弾を無効化してくれよ。あれだけが、A・Tフィールド・ルドの脅威だからな。

02話：新種（笑）

BETAを食らって一週間後。

結論から言うと、私は生き残ったのだ!! あの状態からよく生き残ったものだとなっては褒めてやりたい位だ。だけど、当然その代償は大きかった。

顔の右半分と心臓がある左胸部を除いて、人外へと変貌してしまった。ラミエルのクリスタルに『あ号標的』が混ざってできた特殊な体へと成り下がってしまった。だが、不幸中の幸いともいえるべきだろうか…容姿というか見た目だけはカヲル君を再現できている。

不幸中の幸いと言う奴だろう。

だがお陰様で、私は今や使徒でありながら、地球上の全BETAを束ねる存在になったのだ。超進化もいい所だ。

まさか、自分が倒そうとしていた存在に自分になってしまおうとはね。人生分らないね。

あれから人類側がどうなったのかは知らないが、勝利に酔いしれながら世界各地にあるハイヴ攻略作戦が進行している。私が完全回復する間に随分と好き勝手やってくれたようだ。

!!

「くっ」

世界各地にいるBETAの悲鳴が私の脳内に響く。

上位存在というのも存外大変なものだ。凄まじい情報量が私の中を駆け巡っている。情報処理の方は、私の中で生きているBETAとラミエルに任せて、私は自分の作業に入るかな。

「待っているよ 人類!! こんな体にされた恨みも込めて、たっぷりお礼をしてくれるわ」

人類にとっては、逆恨みもいい所と言いたいだろうが…そんな事どうでもいいのだ。事故であれ、私がいる事を知らなかったにせよ!! 私ごとBETAを滅ぼそうとした事は紛れもない真実!!

では、人類抹殺のプランを教えよう。

皆さんは考えたことがあるだろうか…もしも、BETAの見た目が醜くなかったらどうだったのかと。そう、この作戦の要は ソコにあるのだ!!

原作通りの『あ号標的』には、人類の美的センスを理解できなかっただろう。しかし、今や『あ号標的』は私である!! と言う事で、さっそく行動開始と行こうじゃないか。

あれから、半月後。

今、元『あ号標的』が居たところに、たくさんのBETAが集まっている。ちなみに、私お権限で集めた。だって…一人でいると寂しいんだもん。

それにしても新種のBETA作りは、なかなか楽しかった。やはり、モノづくりは私の性分のような。本来ならば、一種類だけ作る予定が何種類もの新種を作ってしまうとは…私の才能が怖い位だ。

ちなみに、開発した新種は農作業用BETA、建築用BETAだ。こいつらには、人間が住む為の環境づくりをしてもらおう。

なぜ、そんな事をするかって？

そりゃ…私の側に人類を引き込んで”人類vs人類”をやるからに決まっているだろう。人間同士が仲良く殺し合うなんて楽しそうじゃん…昨日の味方は今日の敵ってな感じでね。

そして、最後の紹介になったが…これが私の今回の最大の成果ともいえる

「愛玩用BETAだあああああ!!!」

人型で身長155位の女性だ。ちなみに、身長や容姿だが人類の保護欲をかき立たせるように製造している。無論、あらゆる面で人類と同じである。ただ、唯一違う事はBETAである為、私の絶対服従という一点だけだ。

そうそう…、子供も作れるし産める!! どうだ、参ったか!!

私の叫びに呼応して光線級や重光線級などが修理したばかりの天井に向けて盛大にビームを放った。当然、天井がその威力に耐えきれずもなく天井の一角が落下してきた。

おいおい、喜んでくれるのはいいけど 手加減というものを覚えてよ。せ。

ドドドドーン

目の前で仲間が潰れるのは、目に余るので左手からラミエルの十八番である荷電粒子砲で落下してくる落盤を消滅させた。ラミエルを捕食融合した事で全身どこからでもビームが発射できるようになったのだ。

まったく、手のかかる子達だ。

さて、後は人類側に宣伝を開始するかな。

03話：あ号標的

私は、人類に私という存在を認識させる為の行動に出た。

具体的に何をするかは簡単だ、地上で私の元にBETAを集めればいいのだ。ただそれだけで、相手は私という存在に釘付けになるだろう。BETAの行動には、細心の注意を払っているだろうしね。

後は、どの戦場を選ぶかだな。

世界各地にあるハイヴから私に情報が寄せられている中から最適な場所を選択する。なるべく、目立つ場所がよい。無理だろうけど…人が多い場所がベストだ!! 目撃者が多ければ多いほどこれは有効的なのだからね。

そして、私が選んだ場所はEU…リオンハイヴだ!! あそこには、私の子供たちが巣を作っており、激戦区の一つでもある。まずは、ゼルエルを身に纏い、現地に急行した。

ちなみに、新種のBETAはまだオリジナルハイヴでしか生産しておらず各地には出回らせていない。なんせ、人型BETAは色々とするのが大変なのだよ。人語を理解させる為に色々と手の込んだ調整が必要なのだ。

数時間後。

ふう…やはり、オリジナルハイヴからは思ったより距離があるね。

さて、まずは地上に出ているすべての子達を私の周囲に集めるとしよう。後は、相手からアクションをしてくれるはずだ。BETAを従

える人型の存在はなんなのか!? といった感じでね。

『私のかわいい? 子達よ、集まっておいで』

地下からも溢れんばかりのBETAが這い上がってきた。予想外に、集まりすぎたのでかわいそうだけど、半数は地下で待機させた。だって、集まりすぎるとアメリカがG弾とか撃ってきそうだもんね。

今ここにBETAの大軍が集結した。まさに、精悍の一言に尽きる!! 半数でこの規模とは…BETAの物量に恐れ入ったわ。数の暴力とはこの事だね…まあ、人間相手にしか通じない手法ではありそうだが…。

「さあ、人類よ!! 私はこちらに居る!! 早く迎えに来い」

10分後。

まあ、仕方ない。

相手もBETAの謎の行動に気付いているだろうが下手には動けないからね。

20分後。

きっと、軍隊のお偉いさん達が無駄な事を試行錯誤しているに決まっている。

だから、まだ待とう。

………

………

…

60分後。

さすがに、遅すぎるんじゃない? もしかして、G弾フラグか!!

だが、上空は重光線級に警戒させている為、G弾らしきものが視えれば私は即座に戦線離脱予定だ。G弾といえども、近距離で凄乃皇の自爆クラスを食らわない限り生き残れる自信はある。…一度食らった身である為、ある程度の耐性についてはいる。

90分後。

な、なぜだ…どうして、誰もここに来ない。明らかに私の周りが異常でしょう!! BETAが私を囲むように集まっているのだからさ。誰がどう見ても私が特殊な存在である事など理解できるはず。

「は!! そうか、EUでは日本と違い謙虚さをアピールするのではなく……もっと積極的にアピールしないと通じないという事か!」

そうとわかれば、地上にナスカの絵のごとく言葉を書いた。書いたと言っても戦車級BETAを地面に整列させただけだね。これなら、上空からの映像でもレーダーの反応からでも文字が読めるだろう。

『話がある。各国のお偉いと会話できる準備をしておけ。それと、攻撃しないから迎えの戦術機を一機ここによこせ』

これで、あとは相手が来るのを待つばかりだ。相手が来やすいようにモーゼの十戒のようにBETAを左右に避けさせた。

更に2時間後。

ようやく、迎えの戦術機が見てきた。

私のお迎えに来てくれたのは、EF 2000 タイフーンか…。と言う事は、乗っている衛士は恐らくエース級だろうな。まあ、今の状況において衛士の実力など関係ないけどね。

戦術機が3km位まで近づいた辺りで、子供らに指示を出した。そう、万が一だ…あの戦術機がG弾を積んでいたら流石に不味いので、まずはボディチェックだ。しかし、当然相手の衛士は、畏に嵌められたなどと思うだろうと思い、私はプラカードを持たせたBETAを現地に派遣しておいたのさ。

まじ、この完璧な心遣いマジで自分を紳士だと思う。

とりあえず、衛士を戦術機から降ろして戦術機を隅々までチェックさせた。なーに、戦術機の知識は00ユニットから既に入手済みの為、点検など朝飯前だ。

結果…G弾は無かったがS 11…通称『戦術核』が搭載されていた。当然、戦術核を無効化して全武装を解除させたよ。それにしても、丸腰の私に少し対応が酷過ぎるんじゃない？あわよくば、殺してやろうという事か!?

あ…丸腰と言っても全裸じゃないぞ!! 廃墟にあったものから比較的なまともそうな服を頂戴して来ているのだからね!! こちらの世界に来た際に着ていた服やマントなどは、G弾のおかげで使い物にならなくなったからね。

『私は、フランス陸軍第13戦術竜騎兵』自己紹介何ていいよ。さあ、

指令の元へ私を連れてつてくれ」っ!!」

相手の方は、人型である以上　もしかしたら言葉が通じるかもしれないと思つて自己紹介をしたのだらう。だが、あくまでも思つていただけのようだ。マイク越しに相手の驚きようがよくわかる。

まあ、BETAのリーディング能力を使えば、相手のすべてを読み取れるがそれではツマナイ。相手は、当然私をコックピットになど入れてくれるはずもなく。仕方ないので、私が肩に乗っかり走れと命令をした。

フランス方面、前線基地にて。

すごく、厳戒態勢です。どの位かつて？そりゃ…私を取り囲むように一個大隊以上の戦術機が展開しており、歩兵があらゆる場所から狙撃できるように私に照準を合わせている…その数、もう数えるのが面倒なくらいだ。

私は、戦術機の肩から飛び降りた。

「それで、お偉いさん方は何処かね？案内役さん」

私が戦術機を見上げると、戦術機が施設の入り口を指差した。そこには、司令官らしき男とその秘書らしき女性がいる。なるほど、自分のお役目はここまでと言ふ事か。

熱い視線の中を、基地に向かって歩いていった。

「私が、基地指令のミハエル・バーナーだ」

いくら敵とはいえ、挨拶をされたら返すのが礼儀だね。私ってな

んて謙虚なのだろう。

「挨拶をされたら挨拶をし返すのが風習だったかな？ 私は、レイア・ライシス・ド・ヴェーグルだ」

私が挨拶し返すと基地司令と含め横にした女性までもが、まるで一生で一番驚いたと言う顔をしている。

「良い名だろう。どうせ、この会話も映像も世界各国に流れているのだろう。偽名などではないが…データベースを紹介しても見つからないと思うよ。…それで、準備は終わっているのだろうね？」

まあ、幾ら検索を掛けられようがHitするはずもない。なんせ、私のはこの世界の人間じゃないのだからね。同姓同名が居ないとも否定しきれないが…その場合は、その人には多大な迷惑が掛かる事は間違いない。人権無視の非道な扱いを受ける羽目になるだろうね。

「あ…ああ、こっちだ」

私は司令官に先導されて、基地内部へと移動した。吉と出来るか凶とでるか…まあ、わくわくするね。

基地内の某大部屋にて。

ディスプレイがこうも大量に並べられていると壮観だね。まして、世界各国のお偉いさん方とリアルタイムで繋がっているらしい。

まあ、ディスプレイ以外にもいろいろと準備をしていたようだけどね…時間が掛かったのはそれが原因かと文句を言ってやりたい。

おまけにこの大部屋には、数えるのも馬鹿馬鹿しい位の装置が隠さ

れている。そこまでして、私の正体を見たいのだろうか…。

「覗かれるのは好きじゃないのだがね。指令も貴重なESP能力者をここで失いたくは無いだろう。数少ないオルタネイティブ計画の遺産だ…大事にした方がいいと思うよ」

指令が険しい顔をして何やら仲間に表示をした。

しばらくすると私を監視していた目が無くなった。さて、これで見える視線も無くなったし、ご対面と行こうじゃないか。

「お見苦しい所をお見せしましたね、世界の皆さん。改めて自己紹介させてもらおう。レイア・ライシス・ド・ヴェーグルだ。…と言っても君たちにとっては、こういった方がいいかな？ 私が今代の『あ号標的』だ」

04話：超ホワイト企業、行政法人BETA設立

私が名乗ると一瞬、人間たちは沈黙した。

私が新種のBETAである事位は、想像していただろう。だが、そのBETAがつい先日人類の総力を挙げて倒した『あ号標的』だとは思っていなかったのだろう。

しかし、沈黙も一瞬で終わりを迎えた。ある意味流石というべきだろう…私が対話している連中は世界が誇る敏腕政治家達と言っても過言ではないだろう。

ザワザワ

対話が可能なBETAである事に加えて、地球上全てのハイヴを支配している最上位BETAである。人類にとって私の価値は、計り知れない存在だろう。実際、BETAとコミュニケーションを取る為に天文学的な予算を掛けてオルタネイティブ計画を実施していた位だからね。

何やらディスプレイ越しに、人間達は私とコミュニケーションを取ろうと必死で会話を試みようとしている。簡単に纏めれば、『対話を望む』とか『お互い共存しよう』とか綺麗事ばかりぬかしてきやがる。

当然、無視だ。

「まあ、落ち着きたまえ。君たちが喋っているのは自由だが…私は自分の話を無視されるのは大嫌いなんだよ」

シーーーン

うむ、実に素早い行動だ。

「そうだ、それでいい。悪いが一方的に話させてもらつよ。今日は、君たちへの挨拶と吉報を持ってきてあげたのさ。人類の時間にして一週間後、全人類に向けて重大な発表を行う。それに当たり、君達には私の声が世界に届くように準備をしてもらいおう。当然、タダ

とは言わない。これから一週間は、全てのBETAに活動を停止させよう。もちろん、君達が攻めてこなければけどね」

まあ、ここに居るメンツならば実現させられるだろう。なんせ、世界を牛耳っている連中と言っても過言ではないのだからね。さて、世界はどう出るかな？全面戦争か？それとも、微かな希望に掛けて一週間待つかな？

用件は済んだし、撤収させてもらおう。お楽しみは一週間後だ。

『ま、待ってくれ！ 少しでもいい、君と…いや、貴方ともっと話をさせてはもらえないか？』

私の正面という一番よいポジションにあったディスプレイの主が話しかけてきた。どこに国かは分からないが…可能性が高いのは米国だろうな。

「そんなに話したいか…では、会見を行う場所は米国、ホワイトハウス前でしょうか大統領」

私は、そのまま部屋を退場し基地の外に出た。

基地の外にて。

ガシャガシャ

基地を出たら、入って来た時以上に人間が集まってきている。しかも、全員重武装で武器に関しては実弾入りと見受けられる。おいおい、何処から湧いてきたんだ こいつら!? と言いたくなるくらいの数だ。

「さてさて、基地司令。子供たちが待っているから帰りたいのだが…道が塞がれていてね」

「いかがでしょう? 一週間…この基地でお過ごしになれませんか? 最高の待遇をお約束いたします」

ふむ、最高の待遇か…それは、おいしいお誘いだけど。残念だけど、私はこれから愛玩用 BETA の最終調整をしなければ、いけないから忙しいんだよ。

「断る!! 誰に命令されたから知らんが…押し通らせてもらおう」

ふつ、パフォーマンスの意味も込めて私は、右手を前に突出し…ラミエルの荷電粒子砲を放った。その瞬間、前を塞いでいた戦術機は勿論あらゆるものが蒸発し、道が開けた。

ドコオオーーーーン

ふふふふはははははははははは

「なっ、今のは!」

なにつて? かの有名な凄乃皇が搭載していたアレですよ。まあ、威力の方は比較にならない程のものだけだね。

「それでは、また一週間後に会いましょう。サ・ヨ・ウ・ナ・ラ」

私は、そのまま上空に飛び出して、オリジナルハイヴへと向かった。

世界のお偉いさんにメッセージを伝えてから一週間がたった。

あれから、一週間忙しかった。世界が混乱している隙について、各ハイヴの構造を改変し、戦力分も再構成させた。これで、人間側のカードを一枚潰せただろう。

ホワイトハウスのはるか上空から見下ろす光景は絶景だ。

「見る!! 人がごみのようだ」

某大佐の有セリフを言ってみたが…

「ご主人様、意味がわかりません」

「ご主人様、そろそろ向かわれた方がよろしいのでは？」

くずん

私の横にいる。二人のBETAが返事をした。

今回は、この子たちのお披露目も兼ねているので調整が完了したばかりだが連れてきましたよ。男性に需要が高いだろうと踏んで作った『美少女型BETA』、そしてもう一人が今の世界状況を鑑みて作った『美少年型BETA』だ。

「アダム、イヴ。お前達には期待しているぞ」

名前は…まあBETA初の人型と言う事から有名な神話から採用しましたよ。」

ホワイトハウス前にて。

そういえば、米国ってまだBETAが踏み入れたことが無い土地だったけ。という事は、私がBETAで初めての相手になるわけだ。

フミフミ

「ど、どうかされましたかミスタ・レイア？」

私たちの案内役らしき人が私の謎の行動に疑問を持ったようだ。

「いや、米国に来るのは初めてでね。すこし、地面を踏みしめていたんだよ」

「そうですか。どうぞこちらへ」

うむ、苦しゅうない。

それにしても、カメラとTVの数多すぎない？ 後、人間もシャレにならない数がある。一体、どの様な宣伝をしたのだらうね…人間さんよ。

ホワイトハウス内の演説会場にて。

何処を見ても人人人…そして、あちこちに戦術機と強化歩兵がいるね。まあ、当たり前か…。

「何度も自己紹介は、面倒なのだが…初めまして人間の方々。」

私は、レイア・ライシス・ド・ヴェーグルという。
今代の『あ号標的』と言った方が分かりやすいかね？」

ざわざわ

分かってはいたが、毎度毎度この反応はウザったい。

「《黙れ》」

魔法の力を使い、全員を黙らせた。ラミエルと『あ号標的』を取り込んだ事でこの会場全員を黙らせる事など朝飯前だ。

「安心しろ、ちょっとした暗示のような物だ。私が話し終われば、質問を受け付けてやる。解いてやる。今日は、君達にいい報告を持って来た。まずは、これを見ろ」

私はアダムとイブに持って来た横断幕を広げさせた。

その内容は：住込み三食付、週休完全二日制、勤務時間一日8h、家族同伴可、募集人数一万人：etcなど勤労条件を書いた物だ。

………

………

…

どうだ参ったか！

ちなみに、超ホワイト企業と言っても過言でない位の募集内容だ。
まあ、命は張ってもらおうけどね。

「それでは、質問がある者は挙手したまえ。話せるようにしてやろつ。

ああ、名前など覚える気もないから名乗るなよ。質問だけ手短に言え」

すると、会場の全員が一斉に手を挙げた。お前等手を上げ過ぎだろう。その中から適当に人を選び質問させた。

「私は、ニューヨークタイ……」

パーン

女性が社名乗ろうとしたので速攻で頭を吹き飛ばしてやった。あたりに血しぶきが広がるが、誰もしゃべれない為 悲鳴一つ聞こえない。

「同じ事を何度も言わせるなよ。次！」

今度は最前列に居た男に質問をさせた。

「これは、俗にいう従業員募集という認識で正しいのでしょうか？」

「そうだ」

どこからどう見ても、そうとしか見えないはずだけど。

「待遇内容で色々と気になる点があるのですが、人数が一人、給与がポイント制、そして戦術機の操作やその整備技術、または専門知識に優れた人材の場合は更に優遇とありますが 具体的にはどういったことでしょうか」

「良い質問です。順番に応えましょう。」

まず、募集人数が一万人ですが…これは、住居や食料の生産状況の関係上 受け入れられる上限数です。ちなみに、欠員が出た場合は随時募集をします。

そして、給与のポイント制についてですが、貴方達でいうお金と思ってくれば構いません。ただし、人同士での受け渡し等はできない物の為その人が死ねばポイントも消滅します。また、ポイントで買える商品については、あらゆる物を用意する予定です。例えば、天然物の食材、薬、家、酒、そして、先ほどから私の後ろで待機しているこの子等のその商品の一つだ」

「初めまして、愛玩用BETA アダムです」

「初めまして、愛玩用BETA イブです」

どうだ、かわいい子だろう。

「そ、その子達もBETAなのですか!？」

まさに、驚愕の新事実だよね。

「ああ、基本スペックは人間と変わらん。

もちろん、夜の営みも可能だ。

お前らが言う人権もBETAならば問題なかるう？では、続けるぞ。

戦術機等の知識を持つものを優先するのは、敵と戦うために決まっているだろう。

ああ、そうそう、先ほど商品で言い忘れたけど…

あの子達以外の目玉商品として、

我々の技術を用いて若返りや寿命の延命なども用意してあるぞ」

若い者たちには、愛玩用BETAは最高の商品だろう。しかし、年
老いた老人たちにとっては、使えない商品になるかもしれん。そこで
考えたのが、若返りと延命だ。

「どうすれば、採用されるのでしょうか？」

採用か…そんなにBETA側で働きたいのか。

「採用方法は、実に簡単だ。最寄りのハイヴに行けばよい。既に、各ハ
イヴには精神感応タイプのBETAを多数配備しており、君達が心か
ら私の元で働きたいと思うならば攻撃を受けることはない」

攻撃を受けると言ったあたりから集まった人間達から話が違うぞ
!! みたいな顔をしている。もしかして、和平条約締結みたいな事で
宣伝でもしていたのだろうか。

「さ、最後に…その募集内容には業務内容が書かれていませんでした
が。何をするのでしょうか？」

「人殺しだよ」

一万人という狭い枠にどのくらいの人が集まるか楽しみだ。

ポイント一覧

ポイント表

戦闘時の基本報酬

項目	ポイント	注意事項
1 国家元首殺害	500	000
2 凄乃皇級戦術機撃破	500	000
3 母艦撃破	100	000
4 潜水艦撃破	50	000
5 第三世代戦術機撃破	5	000
6 第二世代戦術機撃破	2	500
7 第一世代戦術機撃破	1	250
8 陸戦兵器撃破（戦車、装甲車等）	1	000
9 輸送車撃破（補給車、揚陸艦等）		500
10 戦闘員殺害（軍人）		10
11 非戦闘員殺害	5	

戦闘時の追加報酬

項目	ポイント	注意事項
1 G弾に関する技術を手入	200	000
2 基地制圧時	10	000
参加者全員		
3 第三世代戦術機入手	10	000
欠損具合により、減点		
4 第二世代戦術機入手	5	000
欠損具合により、減点		
5 第一世代戦術機入手	2	500
欠損具合により、減点		
6 BETAにとって有益な新技術の開発	30	000
又は 情報を提供した場合		

内容に応じて加点有

商品一覧

項目	ポイント	注意事項
1 延命処置	500	000 20
年分		
2 若返り		5
00,000	指定した年齢に若返りさせます。	但し、寿命は延びません。
3 愛玩用BETA カスタム仕様	250	000 貴方だけのBETAをご用意
4 愛玩用BETA アダム or 愛玩用BETA イブ	150	000
5 戦術機改造	100	000 見た目だけ変更可能。但し、性能劣化
6 完全治療	100	000 病気や身体の欠損等を治します
7 容姿改造	100	000 貴方が望む容姿へ変身させます。(TS可)
8 一軒家	100	000
9 一週間のバカンス	100	000
10 天然物の食材(海の幸、山の幸)三日分	100	
11 嗜好品(酒、煙草、お菓子)二日分		100
12 趣のある品物		100
夜の営みに使う品々等		
13 その他(日用品、雑貨等)		10
一品当たり、基本10ポイント。ただし、素材にこだわる場合は必要ポイント増加		

その他

基本給は、毎月50ポイントです。（勿論、技能に応じて差異があります）

住居は、大型の社宅に様な物を用意しております。

食料は基本的に、配給制です。

疑問等がありましたら、可能な限り応えて追記していく予定です。
ちなみに…商品が高いと思う方もいるでしょうが…人類ってまだ
10億人いるんですよ。

単純計算で50億ポイントは稼げるはず!! だから頑張りましよう。

では、また本編で。

05話：トップエース達

私が世界に声明を出してから一か月が経った。

ここまでは 概ね予想通りに事が運んだよ。すでに、BETA側に寝返った人類の数は7千人に達したのだ。やはり、自分の事が一番可愛いのであろう。素直でいい事だ。

「昨日の敵は、今日の友ってか…」

昔の人は良い言葉を残したな。まさに、その通りの状況が起こっているのだからね。おまけに、BETA側に付いた人間の殆どが、戦術機や装甲車などを持参してきた。まあ、ハイヴに向かう以上、歩いて来られるはずも無く 当然の帰結と言うべきだろう。

君達は いつまで生き残れるかな？

君達の雇い主として、仕事ぶりを見に行こうじゃないか。

某前線基地にて。

既に基地は半壊状態であった。各所から火の手が上がっており、制圧まであと一步と言ったところまで来ている。BETAの援護も無く、30機足らずの戦術機で前線基地を落とすとは、なかなかやるではないか。

ちなみに、BETAは基本的には争いに参加しない方向を取っている。なぜなら、我々まで協力したら、一方的なゲームになっちゃうからね。

「君達、良い腕をしているね。この短期間でどうやってここを落とすのだい？」

近くに居た戦術機に話かけた。乗っている機体が不知火の為、恐らくEーS級に近い衛士なのだろう。

「はっ!! 我々の中に、あの基地出身の者がおり、戦力やセンサーの範囲など内部情報があつた為、スムーズに事が運びました」

ふむふむ、流石だね。

「そうか、よくやった。これで基地が落ちれば、君は20万ポイントか…我々の中でも断トツじゃないか。君は、一体何を望むのかな？」

それにしても、わずか一か月で20万ポイントは正直凄いな。どれだけの数の人間をこの短期間で殺したのだ。そうまでして、君が欲しい物が私はとても気になるよ。

「…娘を。故郷でBETAに殺された娘を取り戻したい」

娘か…と言う事は、こいつの望みはアレを希望するという事か。それにしても、娘を殺した親玉に尽くさねばならない、この衛士の気持ちにはさぞ複雑だろう。

だが、そんな些細な感情どうでもいいがな!!

「わかっていると思うが、死者蘇生は不可能だ。お前の記憶をカスタムタイプに転写する事で疑似的に再現は出来るが、それはBETAであってお前の娘じゃない」

「わかっています。だけど、それでも…それでも」

愛玩用BETAをそういう風に運用するとは、少々予想外だな。まあ、私は出来る上司だから、少しでも手助けをしてあげよう。部下が助けを求めているんだ、それを手助けして導くのが上司の仕事でしょう…常識的に考えて。

「ここより、南南西に50km程言った場所に難民キャンプがある。数にして1万人居るだろう」

「…」

戦術機は、南南西に猛スピードで移動を開始していった。頑張ってきてくれ。

あれから更に一か月が経過した。

計画は上々だ。今、我がBETA側についた人間は定員の1万人に達したのだ。それにしても人間どもは良く働くね。人間側を裏切った以上、後戻りはできないという事もありやる気に拍車がかかっているのだろうけどね。

「報告を」

「は!! 先日、ソ連にある前線基地を制圧。

これで我が軍が制圧した基地の数は八つ目になります。

ただ、流石に我が軍の被害も甚大でした。

戦術機を含め総戦力の2割を失いました」

流石は、ソ連…前世で恐ロシアと呼ばれた強国だけの事はあるね。我が軍の2割を道連れにするとはね。

「それで？」

「人員に欠員が出た為、人類側に通知したところ
募集人数の三倍の人数が来た為、先着順で雇い入れました」

人間の替えなど幾らでも居る。どんどん殺し合いたまえ。

「続ける」

「は！ 定員割れ人間については、その場に居合わせた小隊で全て駆逐致しました。ただ、基地制圧時に死亡した者の家族についていかがいたしましょう？」

どこにでも効率よくポイント稼ぎを奴は居るんだな。じゃんじゃんやってくれ。後は、死亡者の家族についてか…そんなものは、決まっている。

「労働の意欲がある者は、職につける。職に就けない者、就かない者は全て殺せ」

「子供や赤子は以下が致しましょう」

「好きにしろ。養つのもよし、ポイント還元するのもよし。ただし、働く意思があるなら職につける」

ちなみに、我がBETAでの職とは基本的に軍役に事だ。食料の生産から建築に至るまで基本BETAが行っている為 生産業に人を回す必要はない。もっとも、研究職や専門職など特化した技能を持つ者は 別待遇だね。

「了解致しました」

そういつと、人間は退出していった。

さて、後は功労者が希望している愛玩用BETAカスタムタイプを作るとしよう。一般仕様と異なり、全て私の手作りだ。なんせ、注文が細かいのが多いからね。

愛玩用BETAの仕様書に目を通した。全部で5件あるのだが…そのうち2体が他の仕様と比べて異質を放っている。

「やはりと言っべきだろうか…まさか、同郷の者がいようとはね」

この世界の人間が…狼耳を持った美少女タイプ…しかも、賢狼とアレとクリソツな者を考えられるはずもない。そして、もう一体は…脱げば脱ぐほど早くなる事で有名は某魔法少女とはね。しかも、声まで希望しているよ。

………

………

…

恐らく、原作知識はあるが特殊能力がない類の人物だろう。だが、戦術機適正は ずば抜けて高いがね。我が軍でカスタムタイプのBETAを持てる程の人物は 両手で足りるくらいだからね。

「良い機会だし、会ってみようかな」

我が軍のエースにね。

06話：限界突破

転生者らしき二名を呼び出した。実際会ってみて分かった…こいつら絶対転生者だと…。なぜなら、こいつらの容姿がその事実を物語っている。

「一応、自己紹介しておこう。レイア・ライシス・ド・ヴェーグルだ」

「私は、元アメリカ軍所属グラハム・エーカーだ」

「俺は、元イスラエル軍所属刹那・F・セイエイだ」

言うまでもないと思うが、名前通りの容姿をしている。三者が互いの顔を見合わせている。全員言いたいことはあるようだ…色々考えているようだ。

「全員、初対面であっているかな？」

二人が頷いた。

「俺が!! 俺達が!!」

「ガンダムだ!!」

ノリノリで刹那が答えてくれた。これで間違いないな。

「逢いたかったぞ!!」

「ガンダム!!」

同じくノリノリでグラハムが答えてくれた。

「やはり、同郷の者か…TVを見たときは、まさかと思ったがな。ならば、何故お前はエヴァに乗っていない!! 二号機もしくは六号機にのっているべきだろう!!」

言ってくれるじゃないかこのガンダム野郎め。私だって乗れることなら乗りたいが…あんなの作れるわけがないだろう。

「エヴァに乗っていないカヲル君など…ただのゲイではないか」

た、確かに…やばい、言い返せない。

上司に対しての礼儀がなくなっておらんではないか。本来ならば、あの世に送るべきなのだが…同郷のよしみで許してあげよう。

ゴホン

「まあ、『冗談はさておき…二人は、どんな経緯でこの世界に?」

マブラブは、ゲームとしては非常に面白かった。しかし、転生する世界としては正直最低ランクに近いだろう。なんせ、敵がほぼ無限に居る上に、人類の寿命が残り10年程度…白銀武が『あ号標的』を撃破しても人類の寿命が30年程度に伸びるだけで、正直生きるのに辛い世界だ。

「俺は…00のDVDをレンタルした帰りにトラックで…。その後にはセオリー通り神様に会って、願い事を聞かれたから『ガンダムに乗りたい』と言ったら、この世界に生まれ落ちた」

「それで、肝心のガンダムは?」

……
……
…

「生まれた時の家に… G A N D A Mと書かれたダンボールが…ぐずん」

ひ、酷い。酷過ぎる。

思わず私までもらい泣きをしてしまった。

「わかるぞ 少年！ 私もトラックに轢かれて…神に『スサノオ』が欲しいと言ってこの世界に来たのだが…5歳の誕生日プレゼントが何故かスサノオのプラモデルだったのだorz」

不憫だ…なんて不憫なのだ。

「二人とも不憫な思いをしていたのだな。 まあ、その容姿と戦術機特性が高かったただけ良かったじゃないか」

「それで、貴殿はどうしてここに？」

貴殿…いい響きだ。是非、今後もそう呼んでくれグラハムさんよ。

「ああ、私は…私の場合は、神様が直接別世界に行ってくれないかと言われてね。最も、この世界の生まれでは無く、『ゼロ魔』の世界出身だけどね」

「なんと!! 虚無の担い手か!？」

「不公平だ!! 不公平過ぎる!!」

まあ、そうだよな。君達を見ていたら私って本当に恵まれている気がしてきたよ。

「いいや、土のスクエアだ。後、容姿から分かるように当然、こんなことも出来る!!」

私は、二人の前にA・Tフィールドを展開した。すべての手の内を見せない為に、ゼルエルやラミエルの事は内緒にしておくつもりだ。

「なるほど…予想通りだ。それで、一体どういう経由で『あ号標的』なんてやっているのだ?」

私は、この世界には『世界扉』の事故で来てしまった事や世界状況を見て善意で人類を助ける為にオリジナルハイヴに飛び込んだ事などを説明した。そして…最後に白銀武に荷電粒子砲＋G弾で殺されかけ、生き延びる為に『あ号標的』を食らった事を説明した。

………

………

…

その後もしばらく、話し合い昔話に花を咲かせた。思いのほか、前世での年齢層が近かったらしく話が合って楽しかった。

数十分後。

「最後に、確認しておきたいのだが…なぜ、人類を裏切ってまでこちら側に?」

「人類側に居る限り、俺がガンダムに乗れる事はないだろう。ならば、可能性がある方に着くのが当然だ。そして、獣耳は最高だ!! 俺は、その為ならばなんだって出来る!!」

ああ…件の獣耳BETAは刹那君が申請者だったね。

「私も左に同じく。」

人類側に居ては、スサノオなど夢のまた夢。

そして…YESロリータNOタッチを信条としているこの私にとって…ここは天国だ。

BETAならば人間でないし適応範囲外だからな」

肉体構造的に人類とほぼ同じだけど…その場も適応されるのか？

まあ、頑張って働いてくればそれでいいよ。

「君達の心意気はよくわかった。これからも頑張ってくれ。

後…追加報酬というわけでは無いが、君達が希望するなら戦術機の見た目をガンダムやスサノオに変えようか？

「

便利な錬金を使い、形を変える程度はたやすいさ。

「お願いしよう」

「俺も」

了解した二人とも。

「あ…そうそう、君達が希望していた愛玩用BETAだが完成したので君たちの宿舎に届け……………って、いないし!!」

私が言い終わるより早く、二人は部屋を退場していた。

一瞬だが、私の知覚速度を超えたぞ…エロは人間の限界をこえるの

か
:

07話：新兵器

ふむ…自分で言うのも何なのだが…『鍊金』ってチートだな。多分、出来るとは思っていたが、まさかこうも思い通りにいくとはね…現在、例の二人の為に戦術機の見た目を『鍊金』でスサノオとガンダムエクシアへと変貌させた。

スサノオについては、グラハムがプラモを持ってきてくれたから細部まで再現できたのだが、エクシアについては正直記憶があいまいな部分が多いので微妙にオリジナルになっている。

それにしても、形を変えたのはいいがさ。これって、うちの整備班が整備可能なのか…。後、不安なのが性能面だ。まあ、今回の変形で多少性能が落ちたところで、あいつ等は死ぬようなタマじゃないだろう。

「会いたかった…、会いたかったぞ、ガンダム!!」

「いや…アンタはスサノオでしょう。なに浮気してんの。無駄に名台詞使わないでもいいよ」

そんなにガンダムが好きなら、今からでも見た目をガンダムに変えてやるぞ。

「ガンダムだ…俺がガンダムだ!!」

「ああ、そうだね。君の!! ガンダムだね」

言葉は正しく使おうぜ刹那君。君のガンダムだから。そんなにガンダムになりたいなら、機体と直接繋がって操縦する技術でも開発依頼

をだしてみるかい？もつとも、それを実現するためには君は人間をやめる事になりそうだがね。

「気にいってもらえたようだな。分かっているともうが…中身は君達が元々乗っていた第三世代となら変わりはしない。むしろ、形を変えたことで色々と無茶をしているから、しっかりとテストしてくれよ」

「無論だ」

「ああ」

後は、問題があればBETA軍の整備班と一緒に改修していけばよいね。

「あ…そうそう、一つ言い忘れたことがあった。機体の改造に当たり君達が持っていたポイントから10万ポイント引いておいたから」

「な、なんだと!! それでは、猫耳タイプが買えないじゃないか!!」

そんな血走った目でこっちを見ないでくれよ 刹那君。

「待て!! ポイントがかかるなんて聞いてない。今ポイントが減ってしまうと週末に『お姉ちゃんを買ってきてやる』と言う約束が守れないではないか!？」

いや、そんなこと言われてもグラハムさんよ。それに、あんたさ…愛玩用BETAに姉をかってくるって…一体どんなプレイする気だよ。

「まあまあ、落ち着け。確かにポイントについて伝えてなかったのは私の責任だ。だから、君たちの為にこちらで追加装備を用意してあげ

た。それで、我慢してくれ。なーに、君達ならば絶対に気に入るはずだ」

私は、用意した新装備を二人に見せてあげた。二人ともそれを見た瞬間、目が輝いていた。そりゃそうだろう、この世界じゃ実現不可能に近い代物だからね。

「これは…光線級BETAか？ 何故か、銃みたいデザインをしているが…」

「は!! そういう事か!!」

そういう事ですょ 刹那君。

そう、これこそ我が軍の次世代兵器『光線級BETA銃タイプ』なのだ。俗にいうビームライフルだ。エネルギー補充がハイヴでしか出来ないという欠点はあるが、それを補ってあまる程の代物だ。当然、『重光線級BETA銃タイプ』も用意した。俗にいう、大型ビームライフルと言って過言ではないだろう。

「これがあれば、すぐに点数など取り戻せるだろう。これからも、期待しているよ」

あまり手を貸す気はなかったが、見た目をガンダムとかにしてしまった以上、どうしても作りたくなってね。少しだけ手を貸しちゃったよ。人間達の驚く顔を見に、私も次の戦争に顔を出してみるかな。

数日後。

現在、基地攻略作戦を見学しに来ております。この間、二人に渡し

たビームライフルの性能をこの目で見る為にね。開戦して僅かに時間
間で基地を制圧か…

「ふっふっふ、圧倒的ではないか我が軍は…」

どの基地にも対BETA戦用に作られて物が殆どで、対人相手の基地
などこのご時世 ほとんど存在しない。

「二人とも使い勝手はどうだい？」

まあ、本日の獲得ポイントを見る限り問題なさそうだがね。

「やはり、性能面での劣化は否めぬ。

だが、このグラハム・エーカーに不可能はない!!」

「機体のバランスが悪いな。

基地に戻り次第、調整する」

そうやって、どんどん改修してってください。だけど、私が聞きたい
のは武器の使い心地なのね。

「で、新兵器の方はどうだった？グラハム」

「先制攻撃用としては使えるだろう。

だが、対人戦ではインターバルの長い兵器は使い物にはならん」

最初の一手しか使えぬか…改造が必要か。多少サイズはデカくなる
が、リボルバー式にしてインターバルの問題点を解決させた方がいい
か。

「刹那の方は？」

「右に同じ。」

もっとも、近接戦闘が主体なので、ビーム兵器は使い勝手が悪い」

そうか…でも、こればかりはどうしようもない。頑張れとしかいいようがないね。

「それで、君達は今ポイント稼ぎはいいのかい？」

私を感じ取った限りでも、まだ基地内部には軍人が籠城しているのが分かる。当然、我が軍でもそのポイントを取得する為に皆が精を出している。なんせ、戦術機に乗れない人にとって基地の残党狩りは、よいポイント稼ぎになるからね。

家族の為に頑張る男達って素敵だよな。

「ふ、私達は既に十二分に稼がせてもらった。

あまり、皆のポイントを奪っては悪いだろう」

優しいね、グラハムさん。やはり、出来る男は違うという事かな。これで、ロリコンでなければ、さぞかしモテモテだっただろうにね…。

「ノルマは達成した」

ノルマね…もはや、作業になってきたか。もう少し歯ごたえのある基地を攻めさせねば駄目だな。

「お…基地の生存者が0になったね。では、かえ」大変です。レイア様
「!!」

帰ろうと思ったたらCPから連絡が来た。一体何を焦っているのだ。

「たった今、米国から核ミサイルが発射されました。
到着まで5分です。ただちに撤退してください」

.....

.....

...

人間相手に核まで持ち出してくるとはね……えげつない。では、早々に撤収するよ。

「各員聞こえたと思うが、間もなくここに核ミサイルが着弾する。
全員ただちに撤収せよ。メガワームはこれより三分後に出発する。
遅れた者は置いていく」

「2分では、そう遠くまで離れられないぞ。大丈夫なのか？」

まあ、本来なら無理だろうね。だから、今回だけは私が少しだけ力を貸してあげるよ。

「今回だけサービスだ。メガワームを
私のA・Tフィールドで守ろう。核ミサイル程度では突き破れん
よ」

「なるほど、私達は先に避難させてもらおう」

そう言い残し、グラハムと刹那がメガワームに避難していった。

それにしても、なぜ今回に限って核を使ってきたのだ。今までだって使う機会があったはずなのに……まあ、考えたところで無駄だな。

「さて、何名欠員がでるかな」

08話・BETA軍衛士

Side とある衛士

オリジナルハイヴを潰してから、全てが変わってしまった。もちろん、悪い意味でだ！人類が総力を挙げて、オリジナルハイヴ…いや、『あ号標的』を潰したまでは良かった。

俺もその報告を聞いたときは、正直感動のあまり涙が出てきた。人類の記念日と言ってもいいだろう。

しかし、事件が起こったのはそれから桜花作戦より半月後の事だ。全世界に向けて重大な発表があると政府から通達があり、我々軍人も食堂やミーティングルームなどTVのある部屋に集まった。

そして、そのニュースを見た時はもう訳が分からなかった。ニュースキャスターの頭がいきなり吹き飛んだり、全員がレイアと名乗る少年の命令に通りに黙っていたり、あまつさえ『愛玩用BETA』なんて物まで紹介していやがる。正直、悪い夢でも見ている気分だった。

その日から世界は一変した。

戦争派と和平派で日々争っているのだ。俺だって、馬鹿じゃないから今回の一件がどれだけ重要なかは理解できる。なんせ、人間と対話が可能で人間を言う存在なのだ。

『BETA軍総務部のイヴです。』

BETA軍より本日のニュースをお知らせいたします。

先日、我が軍によって行われたポーランド前線基地攻略作戦におき

まして米国の核兵器による攻撃で死傷者95人を出しました。

その為、BETA軍の95名分の人員を募集致します。

人数に限りお早めにお近くのハイヴへお越してください。

我々、BETA軍は貴方達の応募を心よりお待ちしております。』

今日もBETA軍からニュースが流れてきた。

また一つ、前線基地が潰されたようだ。それも、人間の手によって。正真、BETAに殺されるよりたちが悪い。白旗を振ってもBETA軍の連中は、問答無用で皆殺しにしてくるそうだ。BETAのように対話が望めない相手ならまだしも、同じ人間だぞ！

ウィーーーーー

基地内部に非常警報が発令された。

BETA軍がポイント一覧表を発表してからというもの 人員募集があるとすぐにコレだ。

『現在、戦術機2機が我が基地より逃亡した。

現時点をもって逃亡者をBETA軍と認定する。

アルファー小隊は、直ちに攻撃し撃墜せよ。

なお、目標は我が軍の情報を持ち出している疑いがある。

ハイヴにたどり着く前に必ず撃墜せよ』

どうやら、うちの小隊の出番の様だな。

ハイヴ前にて。

「悪く思っなよ。こっちも仕事なんでね」

うちの小隊は、ハイヴに逃げ込むギリギリで目標を撃破する事ができた。本当に馬鹿な連中だ。追手を振り切って逃げるといのは、通常難しいのだよ。

そのおかげで我々は苦も無くハイヴまでたどり着けたけどね。

「さて、諸君!! 我々は当初の予定通りBETA軍に鞍替えする!!
これからは、酒に女、うまい飯! なんでも好きなだけ食えるぞ」

「「「おおおおおお!!」」」

それにしても、こうも上手いくとはね。基地でも不穏な空気が流れていた為、誰かが行動するとは思っていた。我々は、それに便乗して逃げればよかった。逃げた二人も殺さずとも好かったのだが、あいにくと人数制限があるのでね。悪く思わないでくれよ。

「諸君。

私はBETA軍所属グラハム・エーカーだ。ようこそBETA軍へ」

見慣れぬ期待がお出迎えにきた。恐らく、BETA軍のエースなのであろう。

「よろしく頼む。

私は、元イギリス軍所属アベル・ジェイラスという」

「君等は運がいい。君たち全員でちょう募集人数一杯だ」

私達はそれを聞き、全員が武器をロックした。

危うく、仲間同士でまた殺し合いをする所だったぜ。

S i d e e n d

数日後。

人材も集まりだし、我がBETA軍も実に充実してきた。なにより、資源が豊富の為　弾薬等は使いたい放題なのがいいね。BETAを使って潰した基地から使えそうなものは全て運び出しているからね。

そして、何よりみんなのやる気が凄まじい。モチベーションが半端ないよ。よっぽど、うまい飯や酒に飢えていたのだろっ。おまけに、我がBETA軍では防衛線に限りBETAが担当するから侵攻作戦以外で死ぬ事も無い。

そのせいで死亡率は　人類がBETAと闘う事に比べて少ないしね。更に、仮に侵攻作戦で敵側に捕まったとしてBETAと違い相手は人間だ。捕虜として扱われる可能性が高い…貴重な情報源としてね。

さて…次は何処の基地を攻め落とすかな…

基地の名前を書いたルーレットを回した。そして、ダーツを投げ次回攻め落とす基地を選択する。どこを攻め落としても構わないのでいつも適当に決めている。まあ、アメリカや横浜は省いているけどね。なんせ、近くにハイヴがないから駐在基地を用意できないからね。

アメリカはともかく横浜には少なからず縁があるからね。是非、ごあいさつに向かわないといけないからさ。

「さて…思い立ったら吉日というし、横浜の魔女さんにご挨拶に行く
としよう。ついでに、今申請されている愛玩用BETAの霞モデルを
作る為に現物を確認したいしね」

なんせ…マブラヴをやったのなんて数十年前だ…一人一人の顔な
んて正直殆ど覚えてないからね。せめて、申請者も顔写真位は持って
こようぜ。

私は備え付けの通信機を手にとった。

『あ、刹那。これから横浜に行くけど何か伝えてきて欲しい事はある
かい?』

『俺は、原作キャラと面識がないから特にない。それに、興味は無い』

ふむ、刹那は原作との接点はないのか…まあ、良い。

では、グラハムにも聞いてみるかな。

『グラハムかい?』

『あ、パパ? パパは今お姉ちゃんと…』

……

……

…

おいしいいい!! 電話位自分で取れよ!!

というか、パパ!? お前どんなプレイしているんだよ。それに、真
昼間からナニやっているんだよ。たしかに、今日は休日だから文句は

言わないよ。本当に、こんなのが我が軍のエースでいいのか…。

『ゴホン。失礼した。何か急用ですかレイア殿？』

『…色々突っ込みを入れたいけど、もういいよ。えっとね、これから横浜に遊びに行くけど何か伝言あるかい？』

『横浜か…以前に米国から視察と名目で一時滞在していたな。その折に、とある女性から告白された事がある。すまないが…その女性に「私は、こちらで宜しくやっている。君も早く良い人を見けるように」と伝言を頼まれてくれ』

…鬼畜だ。

告白の結果を 代理人を通して言うか…しかも、お断りの返事だよ。

まあ、私も言った手前引き受けるけどさ。

『まさか、そんな伝言を引き受ける事になるとは思ってもみなかったよ。それで、相手はだれ？というか…まだ生きている？』

『その点については問題ない。なんせ、相手はA 01部隊の涼宮茜だからな…紳士としてちゃんと返事をせねばなんと思っていたのだ。生憎と返事をする前に、米国に急に呼び戻されてな。悪いが、よろしく頼む』

だったら、紳士らしく自分で返事をしに行かせようかな…。

『了解だ。では、一句たりとも間違えずに伝えてくるよ』

さてさて、では身だしなみを整えて出発するとうしよう。

09話：放送事故

横浜って、本当に何も無いのだな。昔は、中華街とかあって賑わっていたのに残念な事だ。だけど、お蔭で横浜基地はすごく見つけやすかったよ。だって…荒れ地の中にポツンと馬鹿でかい基地があるのだからね。

まずは、門番兵にご挨拶と行こうじゃありませんか？

「ハロー、人類の皆さん。」

暇だったから遊びに来たよー」

門番兵にしてみたら、「冗談じゃないと言いたい位の緊急事態だろうね。速攻で警報が鳴らされて、以前に世界中のお偉いさんに挨拶した時と同様に…いや、それ以上の兵隊が集まっているな。」

流石は、極東の最大の防衛拠点。おまけに、武御雷までご登場とはね…国連だけではなく、日本…いや、ここでは帝国軍まで来てくれるとは大層な歓迎じゃないか。

『動かないでもらおう。』

大人しく捕まるのならば命の保証はしよう…抵抗するようなら力づくで捕まえさせてもらおう』

私の前に立ちふさがり、ウダウダと…本気で私が捕まえられると思っているのか。もし、それが可能ならば　ワイトハウス前で私は既に捕まっているよ。

「邪魔」

ドーン

『きさま!!』

A・Tフィールドを上空に展開し、立ちは大かっていた戦術機をプレスした。少々、力加減を間違つて、地面に大穴を開けてしまったよ。問題あるまい。

「私の前に立って邪魔するからだよ。後、攻撃してこなければ何もしないから安心したまえ。早速だが、これから言う人物 早急に呼び出してもおう」

横浜基地の香月先生の部屋。

私の目の前には、香月先生と霞がテーブルを挟んで向かい側に座っているのだ。涼宮の方は、現在作戦行動中らしく、この基地に居ないそうだ。だから、『呼べ』と一言命令しておいた。

「おや、気に入りませんでしたか。

貴方がコーヒーやお酒が好きだと聞いて厳選して選んできたのですが」

折角、BETA軍の中から1級品を選んできたというのに何が気に食わないのだ。コーヒーは、ブルーマウンテン。お酒の方はロマネ・コンティの三十年物だぞ。この時代じゃ、一生口に出来ないような嗜好品だ。

「いいえ、頂いでおくわ。

…それで、今や世界に名を轟かす大スター様が私に一体何のご用で」

「そんな敵意をむき出しにしないで欲しいですね。」

「それでも、少なからず貴方達とは縁があるんですけどね。」

霞の耳がピコンピコンと動いている。何が何でも私の腹の内を探りたいようだな。

「そう、貴方みたいな個性的な人と会ったのならば忘れないと思うけど…何処であつたのかしらね。」

個性的ね…誰のせいでこんな人間離れした体になったと思ってやがる。それに、横浜の魔女とも呼ばれる程の人物が、凄乃皇四型が持ち帰った記録を解析してないはずがない。

「しらを切りますか…映像で見たのでは ありませんか？ 私が、凄乃皇四型が放つ荷電粒子砲を防ぎ G弾に飲み込まれる姿をね。」

「っ!? やはり、見間違ひでは無かつたようね。」

最初の映像を見た時はまさかとは思っていたけど…貴方、一体何者？」

「あなた方の敵…BETAの親玉である『あ号標的』ですよ。」

「これが、今の私だ。」

「ふう、秘密と言う事ね。まあいいわ、それで一体 ここに何をしにきたの？ 悪いけど、あんたが欲しがるような物はここには無いわよ。それに…長居されると、ここにも核が撃ち込まれそうだから早々に出て行ってくれないかしら。」

「こちらの情報を集めるのを諦めたのか、邪魔者扱いされる。酷いな、せつかく会いに来たのに。」

はいはい、帰りますとも…用事を済ませたらね。

『動くな』

私は霞の頭に手を置いて、身体情報を読み取った。これで、霞型B E T Aは問題ないと。後は、もうすぐ来る涼宮に伝言を伝えて帰るでしょう。

数分後。

「涼宮茜　ただ今　参りました」

「ほら、来たわよ。さっさと用件済ませて帰りなさい」

すぐに終わらせますよ。

「我がB E T A軍のハムの人から君宛てへ伝言だ。しっかりと聞け」

「え、ハ　ハムの人？」

そうだよ。ハムの人と言えば一人しかいないだろう。

……

……

…

え!?　知らないの？

うーん、もしかしてグラハムに騙されたのかな？まあ、とりあえず伝言だけは伝えておくか。

『私は、こちらで宜しくやっている。君も早く良い人を見けるように』だそうだ。男運が無かったと思って諦めるんだな」

部屋を出た時に鳴き声が聞こえたような気がするが…気のせいであろ。さて、そこをどいてもらおうか…国連軍諸君。私は、それだけ伝えて基地を去った。

後日。

横浜も存外つまらなかった。

そして、愛玩用BETA霞タイプを納品し終えた。働くみんなの要望を叶えるのは上司の務めだと思って頑張ったよ。きっと、注文した人も色々な意味でやる気が出たに違いないと信じておこう。

そして、私は私室に備え付けたTVを見ている。

『』の中は、TVの音声です。

BETA軍の人達が暮らす街の公園にて。

『人類の皆さん。見えるでしょうか？ あれが、BETA軍の人達が暮らす人たちの街のようです。戦時中とは思えない程 平和です』

アメリカのTV局から是非 撮影させてくれとの依頼が来ていたので暇つぶしに許可したのだ。下手に編集されないように生放送を条件にしたけどね。

我が軍の素晴らしさが人類に知れ渡れば、更に楽しい事になるだろう。入居者殺到で更に上げつない争いを繰り広げてくれること間違いないのだ。

『どうやら、今日は休日と言つ事もあり 街の公園には親子連れの人達が沢山いらっしやいますね』

実にぼのぼのとした映像が放送されている。子供と遊ぶ親子、公園に隣接したカフェで食事を楽しむ親子。どれこれも、外の人間にとつては驚愕だろう。

『あ、その双子を連れている親子の人がいます。是非、質問してみたいと思います!! すみませんが、少しお時間よろしいでしょうか?』

『私か? 何用かね?』

公園で遊んでいるある親子らしき人物にインタビューを持ちかけている。

.....

.....

...

おい!! なんで、お前がそこに居るんだよ!! 昼間つからニヤンニヤンするのが日課だっただろう。

『あ 貴方は、もしかしてグラハム・エーカーさんではありませんか? お子さんまでいらっしやったとは知りませんでした』

『ふ、男である以上 娘の一人や二人いなくてどうどうする? 私をそこらへんに居る者達と一緒にしないでいただく』

『パパ、早く遊ぼう』

『そつだよ パパ。早くおうちに帰ってキレイキレイして』

そりゃ、一緒にしたら周りの人に失礼だろう。

明らかに、お前の子じゃねーだろう。生放送なのに、キレイキレイとかやめろおおおおお!!

『そ、そうですか。失礼いたしました』

キャスターの人も一瞬困ったようだが、流石はプロ。一瞬で立て直した。差しさわりの無い質問をしてその場を濁してくれた。その後は、街の食糧生産工場などを映像が流れた。映る皆は、誰しもが幸せそうな顔をしていた。

インタビューに答える全員が『BETA軍に来て 生活がよくなった』と口を揃えて言うのだから、見ていて楽しかったよ。

BETA軍の人達が暮らす街のペットとの触れ合い広場にて。

この時代でペットを飼うなど余裕のある家は殆ど居ないだろうが……。BETA軍では疲れを癒す為にペットを飼う事を推奨している。当然、ペットのかかる食費は無料としている為、多くの人が動物を飼っている。

『見てください。この動物たちを!!』

BETA軍では、子供の情操教育の為にペットの飼育を推奨しているようです。

とっても可愛らしいですね』

見たか我が軍の力!! ペットの もふもふ攻撃は最強だ。

『あそこに座っている男の子にちょっと質問してみますね。』

すみませーん、少し質問よろしいですか？』

『なんだ？』

公園のベンチに座り、ペットと様子を眺める 褐色肌の少年にイン
タビューを始めた。

『貴方は、一体何の動物を飼っているのですか？』

『狼と狐だ』

.....

.....

...

お、お前もか!!

待て待て待て!! お前のは、ペットじゃないだろう!? さっきのグ
ラハムは、ぎりぎりセーフ? だけとお前のは、完全にアウトオオオオ
!!

『狼にキツネですか!? 既に絶滅したと言われて、図鑑でしか狼もキ
ツネを見た事が無いんです。是非 視聴者の皆さんにも この機会
に生でご覧いただきましょう』

やめろおおおおお!!

『わかった』

刹那が、自分のペット? を呼び寄せた。しかし、TVに映っている
のは、賢狼にクリソツな美女と狐耳をしたサーバントにクリソツな美

女がキワドイメイド服を着て登場した。

『わっちを呼んだかや？ご主人様』

『なんですかご主人様』

外でご主人様とか呼ばせるなよ!! とうか、これ全世界生放送だぞ!? 恐怖のBETA軍のイメージが台無しだろう。

もう、見るに堪えかねてTVの電源を切った。

今度からTV来るときは、あいっら隔離しておこう。

10話：中東アジア制圧

鉄原ハイヴ間引き作戦の見学に来ております。

「ほほう、試に作っては見たものの…存外使えそうだな」

人類側の大規模な間引き作戦だ。間引き作戦とは、ハイヴ周辺域に存在するBETAの個体数が増加し、一定域内での飽和量に達するとその外縁部にいるBETAが押し出される形で開始される。この大規模侵攻を事前に阻止するため作戦の事である。

もつとも、今回の飽和状態になったのは新型BETAのせいなのだけれどね。三体の新型BETAと改良型重光線級BETAのお披露目会だ。

一体目のご紹介だ。

名前：拠点防衛用超弩級BETAシャムシエル

全長：500m

備考：攻撃力方法が左右の触手と体当たりのみ非常に少ない。ちなみに、触手の先からは溶解液がでる作りになっている。

空は飛べません。要塞級みたいに地面を這いずって移動

その他：これを見た衛士は、『でかい、ソコが迫ってくる！』と女性CPに報告した為、猥褻罪で軍事裁判にかけられる事ことになった。

言うまでもなく、エアンゲリオンに出てくる使徒のモチーフにした新型だ。光る鞭の武装は用意できなかったので、代わりに旧『あ号標的』が装備していた触手を取り付けた。当然、先端部は男のアレに似せておいたよ。装甲には、モース強度15以上あると言われる要塞

級のかぎ爪状の衝角と同じものを使っている。なんせ、500mもあると誰が打っても外しようがない位の的だからね。無駄に頑丈にしておかないと再建費用が…。

二体目の紹介だ。

名前：人型腹マイトBETAマタニティ

全長：1.5m

備考：回収した人類側の死体を元にBETA軍が利用している爆薬を腹に詰め込んだ新型だ。

爆発の威力は、手榴弾一発程度の為、戦術機や装甲車などには効果は期待できない。近年は流行りのリサイクル精神に乗っ取ったエコBETAである。なんせ、人類側の死体など毎日大量に量産されているからね。人類側の基地から押収した火薬を無駄なく仕えて便利極まる。開けた平原などでも戦闘では、活躍の場は少ないが市街地などの隠れる場所が多い所で真価を発揮するだろう。

三体目の紹介だ。

名前：昆虫型BETAイナゴ

全長：3.10cm

備考：人間子供が素手で倒すことが可能なBETAである。但し、数万という大軍で

行動を行う為いくら弱いと言ってもその中の飛び込むのは無謀と言えるだろう。

腹が減っては戦ができん！という諺がありますよね。人間が備蓄している穀物などの食料を食い荒らす事を目的に作り上げたBETAである。小型である為非常に排除しにくい。なぜ、食糧に限定したかというとちゃんとした理由がある。人間生きる為には食わないといけない…つまりだ、食い扶持を減らしてしまつてはイナゴの効果が半減してしまうのだ。その為、あえて人間は殺さないように

作ってある。

「それにしても、圧倒的物量の前には人類とはいえこの程度か…つまらん」

眼下では、シャムシエルに戦艦の支援砲撃と戦術機の過剰なまでの攻撃が集中している。しかし、シャムシエルの強固な装甲の前に前線は既に崩壊気味だ。

そして、歩兵たちも前線が崩れたせいでマタニティの餌食になっている。抱き着かれたら最後、そのまま自爆されてあの世行きさ。

『人類側の食糧保存庫の場所は分かったか？』

『はい、どうやら海上にある戦艦を物資の保管庫として利用しているようです』

まあ、海に面しているハイヴならそうするか…。私は、イナゴーに向けて海上にある戦艦を襲う様に命令した。正直、襲われた戦艦はたまったものではないだろう…。ただでさえキモイBETAが小型であるとはいえ数万という数で襲って来るのだ。まさに、地獄絵図だろう。

さてさて、改良型重光線級BETAを最後にご紹介しましょう。

人類側って光線級の攻撃を回避するプログラムを組んでいるでしょう？あれって、元々BETAが味方を撃たない事を想定に作られているのですよ。つまりだ！味方ごと打ち殺せば人類側は回避できないと言っ事になるのですよ。

「改良型重光線級BETA・TAMAの性能を見せてもらおう。極東一のスナイパーと呼ばれた実力を存分に発揮してくれたまえ」

旧『あ郷標的』のデータを元に再生した「珠瀬 壬姫」の頭脳を搭載しているのだ。当然、自我などと言った余計な物は排除済みだ。戦場は、新型BETAの登場により瞬く間に人類軍の数が減っていく。圧倒的射程から司令官クラスの戦術機を確実に撃破していくTAM Aは、極東一のスナイパーと名高い事はあった。

恐らく、後一時間もすれば壊滅するだろう。

グラハムと刹那の方も上手くやっているだろうか…敵の主力がこちらに居る間に中国を叩くというのが今回の作戦だ。この作戦がうまくいけば、残る強国はソ連、EU、アメリカあたりか…日本はぶっちゃけ、資源不足の為大した脅威でもない。

S i d e 刹那

上空5000mの戦術機航空輸送用BETAサンダーバードにて。

まるで全身が縄で縛られ身が締め付けられる程の緊張感だ。

『お互い初めての降下作戦だな 刹那』

『ああ、今までは光線級の存在の為 降下作戦など自殺行為だったからな』

間引く作戦の隙を狙い、中国の首都を落とせとは無理難題を言ってくれる。いくら、主力部隊が居なくとも 常駐部隊だけでもこちらの倍はいるだろうに…。

『地上班からの連絡では、レーダー基地の制圧と対空迎撃可能な兵器は全て破壊したそうだ。もっとも、こちらの被害も甚大だそうだ…』

『後はエース部隊の出番と言っわけか…。それにしても、ここまで戦術機がばらばらの部隊も珍しいな』

グラハムや俺もそうだが…ほかの連中もチラホラと見た事あるような機体に乗っている。スーパーロボット系では、『ガンバスター』『エヴー二号機』。リアルロボット系では、『サイバスター』『ゲシュペンス』と…転生者は私達だけではないと思ってはいたが、ここまで多いとはな。

ピピッピッピ

『まもなく、目標地点に到着します。パイロット各位は、機体の最終チェックをお願いします。大変厳しい現状ですが、無事に帰還されることを祈っております』

CPから連絡が入って来た。

この日の為に、用意された改良型光線級BETA銃タイプを手にとった。これは、インターバルの問題をリボルバー式にする事でその問題を解決させた。ドックファイトでは、使えないだろうが降下中に戦術機を潰すのにはちょうど良い。

『お互い、生き残ったらパーティーでもやろうじゃないか 刹那』

『それはいい考えだな。だが…これだけは言わせてもらおう!! お盛んのはいいが、時と場所は弁えろよ』

『イヤ、そこは…らめえ』

一人用のコックピットになぜか男女の営みの音声が聞こえてくる…。行く時もイク時も一緒というやつか…全く、どという神経をして

いるんだ。

『ふっ、この程度 紳士の嗜みだ。それに刹那こそ、強化服を着ずに亀甲縛り一つで戦場に向かうとは…死ぬ気か?』

『何を言つかと思えば…この縄こそが俺とペットの絆！強化服など所詮飾りだ』

変態紳士のグラハム…ドMに刹那…正直どちらもいい勝負だ。

これは、出陣前の営みで結んだあいつとの絆…これがある限り、俺は死なん!!

『あの…他の皆さんは、出撃したのでそろそろ出てもらえませんか?』

………

………

…

「エクシア 出撃する!!」

「同じく スサノオ出撃する!!」

今度、俺もペットと一緒に搭乗しようと思っただけに誓った刹那であつた。

数時間後。

S i d e レイア

「BETA軍諸君！ 君達のお蔭で中東アジアのほぼ全域を我がBE

TA軍の手中に収める事ができた。残る強国を倒すために皆の一層の健闘を期待する。では、まだまだ残党も居るだろうから、後は自由行動だ」

「……………うおおおおおおお!!!!」

グラハム、刹那などのエース陣の活躍により中国を落とす事に成功した。しかし、流石に我が軍の被害も酷かった。国連軍が介入してくれば、全滅もありえたかもしれないが…しかし、なぜか介入がなかった。

おまけに、アメリカも動きはなかった…G弾が来た際は私自ら砲撃で撃墜しようと思っていたのだがね。

実に不気味だ。

人類側の動きも気になるが、まずは世界各地にイナゴの配備を急ごう。そして、同じタイミングで我が軍に集まった世界が隠していた情報を一挙公開するのだろうか。食糧難に政治不信のダブルパンチだ。

ついでにオルタネイティブの情報も世界に公開しよう。特に、オルタネイティブ5なんて公開した日には 世界が荒れて楽しそうだな。なんせ、やろつとしている事が我々BETA軍と被っているからね…選ばれた人だけ別の惑星に逃げるというあたりがね。人類の反応が楽しみだ。

11話：過去編

中国を落とした祝勝パーティーを行っております。

当然、費用は私の自腹だよ。まあ、自腹と言ってもBETA達が作っている天然素材を使った料理を振る舞っているだけけどね。私が居ては皆も楽しめないだろうから、別室でグラハムと刹那と飲んでいるよ。

今回の作戦の愚痴を聞いてあげているよ。もちろん、聞くだけだけどね!! その話を聞いているとこいつらが馬鹿だという事を再認識させられた。

何処の世界に、亀甲縛り一つで戦術機にのるアホが居るんだ…。
何処の世界に戦術機で戦闘しつつやっているアホが居るんだ…。

「ここに居る!!」

二人がお互いを指差した。

あ、頭いてー or z

なんで、こんなのがBETA軍のエースなんだよ。

しばらく三人で飲んだ後に私は、夜風に当たる為にハイブの外へと出た。月が綺麗な夜空であった。もっとも、綺麗なのは見た目だけだがね…あそこは地球をはるかに凌ぐ地獄絵図となっている。

「私がここに来たのもこいつの日だったな」

思わず力が入ってしまい、辺り一面をA・Tフィールドでプレスしてしまった。当然、自分もろとも…夢なのにまるで自分が潰されたかのように痛い…というか、これ夢じゃ無くね!!

そう思った瞬間、一気に眠気が吹っ飛んだ。

「……何処よ……」

30分後。

少々取り乱したが大分落ち着いてきた。

まずは、落ち着いて私に身に起こった事を考えるんだ。恐らくだが…月が一つしか見えない事からハルケギニアではないだろう。ここがどんな場所かは、定かではないが…地球型惑星である為、当面の食糧には困ることはないだろう。もっとも、最近では食事をせすとも問題ないがね…ティファニアと暮らしている内に私もだいぶ進化したようだ。私にとって食事とは、煙草などの嗜好品と同じなのだよ。

次に、なぜ私がここに居るかだが…こんな芸当ができるのは、エルフしかない。時間や次元、異世界、死後の世界などを自由に行き来できる人材を何人が知っているからね。だが、今回の一件は、恐らく…ティファニアが原因だろう。

私の記憶が確かなら寝言で『おいしそうな力二さんが一杯です。てへてへ…レイアさん、取ってきてください』とか言っていたような気がする。その力二さんが何を意味するかは知らないが、その言葉を言い終えた後に“世界扉”の呪文を寝言交じりで唱えていた。

あの時、私も眠かったのですそのまま寝たのが間違いだった…ティ

ファニアを起こすなり逃げるなりすべきだったが…眠気が勝ってしまったのだよ。

「とりあえずは、人里を探そう。うまくいけば、知的生命体位は、いるだろう」

私は、人里をと探す為にその場からとびだった。

この世界に来て早二日目。

「ここも無人か…」

これで三つ目の街なのに既に廃墟と化して誰もいない。しかも、ここを廃墟と言っているいかも疑問だがね。なんせ、建物の残骸なんて何もない…あるのは、建物が立っていてであろう後だけなのだから。

だが、収穫はあった。

私の手には、世界地図が握られているのだ!!

これを見た時には、もうビックリしたよ。だって、身に覚えがある形だなと思ったら…日本とかアメリカとか国があるのだからね。いやー、懐かしいね。本当に何年振りだろう。

だが…犬のせいで以前に滅ぼした地球とは若干違うようだな。ラオウ様やビダーシャル含めた知人エルフが暴れた場所にしては原型を留めすぎている。よって、パラレルワールドである事は間違いないだろう。別世界の地球だとしても人口60億近く人間は居るはずなのだが…人氣が全くない。無人のゴーストタウンなど早々ある物じゃないだろうにね。一体どうしたんだろう。

とりあえずは、海にでも潜って晩飯でも確保しよう。折角、地球に来たのだ。久しぶりに故郷の魚の味を賞味しよう。

海岸沿いにて。

パチパチ

リトルクラッカーを使ったダイナマイト漁のお蔭で大量の魚をゲットした。何匹かは、乾燥させて保存食にしよう。焼け具合からしてまさに食べ頃だ…だが、生憎と食べるのは少し後になりそうだ。

人の気配がする。

「おいおい、こんな場所で火を焚いたら居場所を教えているようなものだぜ。そんな事しいたら、良からぬ輩に身ぐるみはがされるぜ」

「ははははは、ちげねー」

二人組の男たちが現れた。

「それは、ご忠告感謝します。それで…身ぐるみはがされる前にいくつか質問よろしいですかな？」

「ああ、なんでもいいぜ」

どうやら、私の身に着けている宝石などがたいそう気になるようだ。いいだろ…エルフが作った品物だぜ。この世界じゃあ二つとない貴重品だ。

一応確認しておくか。

「ここって、太陽系第三惑星地球であっているかい？」

「はあ？」

うむ、実に予想通りの反応だ。

「いや、だからここは地球かって聞いているんだよ」

男達がお互いの顔を見合わせている。そして、私をまるで可愛そうな子を見る様な顔をしている。

「はっはははは、ここまで頭のいかれた奴は初めて見た。いやー、BETAのせいで頭までやられたってか」

「くっくく、ああそくだへ地球によっこそ。宇宙人さん」

二人が大笑いしている。

それにしても…あれ？今何か聞き捨てならない単語を耳にした気がする。

「おい、その人間。今、BETAとか言わなかったか？」

「ああん？それがどうした」

なんてこった!!

確かに地球だけど…すでに詰んでいる地球じゃないかよ。早急に逃げ出したいが…この広い宇宙でハルケギニアの座標など分からんし、それに同じ宇宙にあるかすら疑問だ。…と言う事は、私に出来るのは迎えを待つだけと言う事か。

そうと決まれば、まずは情報収集だ。

「二人も不要だ…《自害しろ》」

パーン

一人の男が銃口を頭に付けて引き金を引いた。

「さて、お前の知っている事を全て聞かせ持てらおうか…。安心しろ、すぐに仲間の後を追わせてやる」

「てめえ!! ぶっ殺してやる」

………

……

…

数分後。

「ご自慢のマシガンもA・Tフィールドの前では、水鉄砲にも劣る。男を優しく尋問した後に母なる海へとお返しした。なるほどね…ここが、あのマブラブオルタの世界か。しかも、桜花作戦三日目前ってどういう事だよ。」

「こういう異世界来訪系とかは、原作開始前とか開始と同時に来るものだろう。なんで、もう終盤なんだよ。」

「まあ、原作嫌いじゃないし…少し手伝ってあげようかな。異世界だし、少しくらう羽目を外しても誰も文句はいわないだろう」

そうと決まれば、参戦しますか。大ぴらに参加して、無駄な混乱を招くと思いから…原作組を反対側から単機で挑むかね。さあーて、どっちが早く『あ号標的』にたどり着くか勝負しよう。

数日後。

主人公一行の作戦が開始されたのを聞いて、私もオリジナルハイヴに潜っている。

それにしても…まったく、倒しても倒しても湧いてくるのだから性質が悪い。おまけに、北斗神拳は効果ないから「お前はもう死んでいる」ごっこが出来ないではないか。

モサモサモサ

前方に再び戦車級が山程湧いてきた。

「おいおい、いい加減。そのキモイ面見飽きたんだよ。ラミエル…薙ぎ払え」

ドコーン

ラミエルの形状が変化し、前方の敵を荷電粒子方で薙ぎ払った。いつみても、素晴らしい威力だ。前方にいたBETAが綺麗さっぱり居なくなり、視界もスッキリだよ。

それにしても…さっきからどうも我々に敵が集中している気がする。考えられることは一つ、「あ号標的」に主人公一行より危険度が高いと認識されたか…。まあ、あれの助っ人としてきているわけだし…構わないか。主人公一行には、最後に私も連れて脱出してくれれば、それでいい。

数十分後。

迷ったorz

だんだんと深部に近づいているのは、土のメイジとしての直感でわかるのだが…こんな事なら、ゼルエルのビーム一撃で地下まで貫通させて「あ号標的」の居る場所に直接攻め込めば良かったな。

パンパン

あれ？今遠くで銃声が聞こえたぞ。と言う事は、近くに人間が居るという事か…道案内にはもってこいだな。えーと、どこだどこだ？

ラミエルと一緒に銃声がした方を探ってみた。

「ふむ…大破した戦術機と生き残りの兵士が一人か。だけど、ただの人間が強化服一つで生き残れる程ハイヴ深部は甘くは無いよね」

機体がラプターである事から、恐らくアメリカ兵だろう。それに、こんな深部に居るという事は、何やら訳がありそうだね。色々とお話が聞けそうだね。私が考えている間に、唯一の生存者に闘士級BETAの魔の手が迫っていた。

まだ情報を聞き出す前だから殺されるわけにはいかないんだよね。私は手に持っていた黄薔薇をBETAに向かって投擲した。

ズキューーン

黄薔薇の直撃によりBETAを沈黙させた。やはり、薔薇族の武器

は強いな。拳銃で殺す事が困難な相手ですら一撃とは恐れ入る。さて…まずは、ご挨拶と行きましょう。

「こんばんは、今日も良い天気ですね 御嬢さん」

「ご、こんばんは。…はっ!! 危ない所を助けていただきありがとうございます。ございます。私は、アメリカ陸軍所属アメリカ・サーシャ少尉です」

やはり、アメリカか…。と言う事は、ここにいる理由は迷い込んだわけでないね。恐らく目標は、「い号標的」…アメリカが程から手が出る程欲しがっているG元素の精製プラントと言う事か。

それにしても、礼儀正しい挨拶とは裏腹に…随分と大胆な行動にでますね。

「いい加減、銃口を私に向けるのは止めてくれないかね。間違って引き金でも引かれたらたまったものではないからね」

「命の恩人相手に私も非常に忍びないのだけど…貴方の所属と目的を聞くまでは、下げる事はできません。それに、一体どうやってここまで来たのです。強化服すら身に着けず、槍一本で突破できるほどハイヴは、甘くはありません」

銃口を向けなければ、少しは長生きできたかもしれないが…残念だ。

「所属ね…あえていうならば無所属だよ。後、ここまでは徒歩と空を飛んできたよ…いや、マジで。後ね、生身でここまで来られる様な人物に拳銃なんておもちゃ向けても何の意味もないよ。《両足を撃ち抜け》」

パパン

「きゃああああ!!」

甲高い悲鳴が響いた。

『あ号標的』の場所を吐いてもらいましょう」

レイアの優しい尋問により、『あ号標的』の場所が判明した。もつとも、米軍が知っているのは横浜の魔女である香月先生によって改竄された情報ある為、どこまで正しいかが疑問ではあるが…少し位役に立つだろう。

そうそう、尋問を終えた女兵士の事だがBETAに美味しく頂かれたのは言つまでもない。…私悪くないよ。尋問後に、床に放置していたらBETAが沸いてきた勝手に食べられたのだからさ。

さて、『あ号標的』目指して出発!!

30分後。

あ号標的の台座にて。

多少道に迷ったけれど、なんとか『あ号標的』にまでたどり着けました。『あ号標的』がいる部屋に入る際にシエルターの様な物があつたので色々とぶっ壊してきました。

「それにしても、予想以上にデカいな…そして、触手もデカすぎだろ」

ゲーム画面で見た『あ号標的』は、あまり大きく感じられなかった

が…実物を見てみるとマジでデカイ!!それにしても、来るタイミングが少し悪かったな…まさか、『あ号標的』を挟んだ向こう側で主人公一行とバトルの真っ最中だったのは予想外だ。

そのおかげでどちらも私の存在に見向きもしない。

とっても、悲しい…私だって功労者なのに誰にも評価されない…;

おっし!!

ちよっくら、反対側に回り込んで挨拶するかな。

「やっほおおおおおおお!! A・Tフィールド全開!!」

私が挨拶をしにいった瞬間、淒乃皇による荷電粒子砲撃が私に迫って来た。思わず、広範囲に全力でA・Tフィールドを展開してしまった。そのおかげで、倒すべき目標であった『あ号標的』すら守ってしまふという失態をしでかした。

ドゴーン

少々揺れはしたが、所詮よくみる荷電粒子砲撃だ。A・Tフィールド1枚すら破られなかった。そして、視界が晴れると淒乃皇から脱出ポットが大空に向けて発射されるのが見えた。

「ひ、ひでえ…置いてきばりかよ」

……

……

…

あれ？この後何かあったような・・・

はっ
!!

「ラミエル!!」

12話：権力者達

某合衆国の秘密クラブにて。

高そうな天然素材をふんだんに使った食材が並べられている。

そして、ワインを片手に料理をつまんでいる複数人の男達がいる。

「最初は、新たな『あ号標的』など絶望したが…存外役に立ったな。まさか、中国を潰してくれるとはな」

「私が、国連に圧力をかけて国連軍の派遣を渋った功績を忘れないでいただきたい。あれには、相当苦労したのだよ」

「はっはっは、そうでしたな。おかげで、オルタネイティブ5の空席ができましたな。確か、議員Aは愛人分の席が欲しいと仰っておりますね。すぐに手配致しましょう」

「全く、BETAですら食い物にする人間とは恐ろしいですな」

「オルタネイティブ5を担っている大企業の会長とは思えないセリフですな。オルタネイティブ4の功績で大きな顔をしているアジア連中にいい薬になったと喜んでいたではありませんか」

「こりゃ、一本取られましたな。ところで…いつごろオルタネイティブ5を実行に？」

「既に、オルタネイティブ5推奨派が各地で動いている。もう間もなく、実行に移されるだろう」

「それにしても、『全人類で選ばれた10万人を地球から脱出させる』

となっているが、その選ばれた人類の半数以上がアメリカ人だと言う事に一体どれだけの人間が気付いているのかな」

「誰も気づかんさ…なんせ、この計画をしている物が極めて少ないからな。他国のクズや我が国の国民が気付く頃には我々は既に宇宙に居るさ」

この会話が、まさかBETAに盗聴されておりそれがある事か生放送で世界中に放送されているとはここに居る者達は思いもしていないだろう。

ちなみに、新型の隠密撮影用BETA・アンダースポット によって放送されている物である。

ブチン。

私は、見るに見かねてテレビを消した。

………

………

…

「我々ですら食い物にするとは…人間怖いね。だけど、この放送を見た世界中の人間の反応が楽しみだと思わないかい？ グラハム、刹那」

「間違いなく。暴動が起きるだろうな。特に先日の生き残り達にとっては、寝耳に水だろう」

「同じく」

やっぱり、二人もそう思うか…。だが、それがいい!!

内部から瓦解していく様を見るのも悪くは無いだろう…だが、その前にやるべき事があるな。

「ちよっくら、宇宙にいつて人類の希望とやらを我々BETA軍の宇宙船にしようと思うのだが、どうだろう?」

「ついに、BETA軍のポイント表に宇宙旅行を追加するという事が娘達と行くと三人分か。お父さんは、頑張らないといけないな」

宇宙旅行か…悪くないね。宇宙船が確保できたあかつきには、宇宙旅行も視野に入れておこう。

「一つ聞きたい」

おろ、珍しく刹那が質問してきた。

「なんだい?刹那」

「宇宙で出産したら…その子は宇宙人なんだろうか?」

………

………

…

しらねーよそんなの!!

余談だが、例の特別生放送は視聴率が全世界で75%を超えた。まさに、世界的記録を塗り替えたと言っても過言ではないだろう。途中から生放送の一件がばれてしまい、隠密撮影用BETAが始末されたのは残念だが…あの議員たちの慌てようは実に楽しい物だった。

私は、すかさずBETA軍総務部のイヴに連絡を付けて、オルタネイティブに関するすべての情報を公開させた。相手が先手を打って偽情報を流さないようにね。いやー、良い仕事をした。

やはり、秘密主義はよくないよね。

後日。

今、世界は浄化への一步を踏み出した。

先日、我々BETAが流した生放送と公開されたオルタネイティブの詳細情報のおかげで世界規模の暴動が起きているのだ。当然、各国もBETAの戦略だとか偽情報だとか言ってはいるが、無駄だろう。

なぜなら、私がオルタネイティブ5で使用する予定の宇宙船を全て抑えたからね。そして、その宇宙船の一機を証拠として、太平洋に着水させている。言い逃れようのない証拠だ。

念の為、世界各国の情報を確認しておくか。

「アダム、世界各国の状況は？」

「概ね、レイア様の予想通りです。国連軍並びにアメリカ軍に対するバッシングが世界規模で行われております。特に、アジア一帯でのバッシングが酷く、既に銃撃戦になった場所もあるそうです。また、米国内でも政治に対しての不満が爆発し各地でデモが行われているとの事です」

この世界で唯一の大国であるアメリカ相手に世界中の国が襲い掛かるか…いいね！。

世界が狂喜で満ちていく。

「では、ここら辺で私が世界の不満を解消すべく手を差し伸べようじゃないか。生放送の準備をしてくれ」

「わかりました」

アダムとの通信を切った。

BETA軍報道局にて。

『世界中の皆さん、こんばんは。』あ号標的』のレイア・ライシス・ド・ヴェーグルです。今の皆さまのお気持ち心中お察し致します。今まで信じてきたものに裏切られ、見捨てられ、あまつさえ捨て駒扱い：これでは死んでいった仲間もうかばれないでしょう。そこで、私は皆様に出来る事はないのかと思ひ色々と考えました。そして、思いついたのです：先日、我々BETA軍の生放送時点でのアメリカの全国会議員並びに大統領、オルタネイティブの情報を知りえた国連軍とアメリカ軍上層部の全員の首を差し出せば、三か月間我々BETA軍は全ての活動を停止致します。もちろん、攻めて来るようでしたら防衛はしますけどね』

決して悪い取引では無いはずだ。だって、三か月で死ぬ人間の数は優に数万：下手すれば数十万だ。それが、数百人の首を差し出すだけで済むのだから実に効率のいい取引だ。

『誰の首を差し出せばいいかわからないでしょうから、我々BETA軍の方でオルタネイティブの情報を知りえた人達の情報を公開しましょう。案外、皆様の身近に住んでいるかもしれませんよ…。我々と闘うか、人の命をゴミとも思わない連中の首を差し出すか、お好きな

方を選ぶといいでしょう。ああ、言っておきますが…政治家の首が出そろうまでは我々の活動は停止しないのであしからず。最後に、これを聞いてくれている皆に一言……今こそ一丸となり、巨悪の根源を根絶やしにする時である!! 立てよ 国民!! そして、自らの手で平和を掴み取るのだ!!」

「はい、カット!! お疲れ様でした レイア様」

ふうー。

やはり、なれない事は難しいね。

これが私に出来るせめてもの慈悲だ…三か月の平和を勝ち取る為に頑張ってくれ。少なからず応援しているよ。もちろん、こちらの進軍の手は休めないけどね。

「おっし!! 次はヨーロッパを全部落すぞ!! 人類が短い平和を勝ち取るか、我々が先に根絶やしにするか勝負といこう」

ちなみに、その日以来アメリカ各地で議員が殺害さえる事件が多発した。もちろん、殺害された議員が偽物でないかを確認する為に我々BETA軍が死体を回収し、検証した後に生き残りと死んだ人数を放送していった。

Side とある米国一般市民

例のBETA軍の放送から三日後。

私は、数十人の武装市民や他国の兵士崩れと共に国会議員宅の近くに身を潜めている。

「今、仲間の警備兵から連絡があった。議員が帰宅したそうだ。全員、準備はできているな」

「ああ、問題ない」

今から、私がやろうとしている事が本当に正しいかなど、もはやどうでもいい。例え間違っていたとしても、誰も責める事など出来ないのだから。

一時の平和の為、死んでいった同胞の為…悪いが死んでくれ。

「今から2分後に突入し、議員Aの首を取る。いいか、相手を人間だと思うな…人間の皮を被ったBETAや悪魔だと思え」

リーダーが全員を励ます。

ああ、分かっているよ。自分たちを犠牲にして自分達だけ別の惑星に逃げようなんて連中同じ人間であるはずがない。

13話：人間辞めました

BETA軍より平和への殉教者リストが公開された早一か月…世界では、未だに政治家や軍上層部を対象にしたテロやデモ行動が多々行われている。

「人類は実に愚かな生き物だ…だが、そこがイイ!!」

そのおかげで、軍の指揮系統は何処も壊滅的と言ってもいいだろう。中でも、米軍や国連軍の混乱ぶりは群を抜いている。おまけに、兵士の士気も最低ときたものだ。まさに、人類側にとっては踏んだり蹴ったりであろう。

「そのおかげで我々は苦もなくヨーロッパを落とせたわけだ…それにしても、齒ごたえが無さすぎるぞ!!」

「自業自得だ…だが、そんな人類に対しても一切の手加減はしない!!
それが俺達BETA軍だ!!」

グラハムと刹那がかっこいい事を言っているけど、やっている事はただの虐殺だけだね。BETA軍の働きのお蔭で残る強国は、ソ連とアメリカだけだな…もはや人類の命は風前の灯だ。

小国は多々残っているが、昆虫型BETAイナゴの働きにより世界規模で飢餓が広まっている。今では軍人ですら一日二食あればいい位だ。

「しかし、本当に手加減しないよな…白旗振っている敵にすら問答無用だからな」

「愚問だな。例え俺が殺さなくてもほかの誰かが殺すだろう。ならば、俺のポイントにする方が有意義だ」

素晴らしいご高説ありがとうございます刹那。やはり、お前等最高だ。

「流石は、ガンダムマイスターだ。世界の歪みと闘うキャラの言う事は、やっぱり違うな。その調子でどんどん殺してくれ。もちろん、グラハムにも期待している」

「任せておけ」

レイア私室にて。

「殉教者リストの消化状況は、どうなっている？」

私は、部屋に備え付けてあった通信機でBETA軍のイヴに連絡をした。

「はい、現時点の消化率は約60%です。最近では、議員や軍上層部も警備に戦術機まで持ち出すようになり、あまり進んでおりません。後、本日 我が軍に有益な情報を持って投降して来た米国の者が数名おりますが、いかが対処致しましょう？」

ほほう、人類側においては逃げ切れぬと悟ったか、良い判断だ。

「本来なら情報だけを奪ったうえで始末するのだが…私もそこまで鬼ではない。情報次第では、次の補充要員として優先的に枠をあてがつてやろう。それで、持って来た情報は確認したのだろうな？」

「もちろんです。グレイ・ナインの研究資料と淒乃皇の資料です」

おお!! ついにこの時が来たか!!

我が軍でもグレイ・ナインについては研究させていたが研究者の質が米国とは比べ物にならなくてね。そのおかげで、研究はあまり進展がなかった。だけど、米国から持って来たという資料があれば我々でもG弾生成が可能になる日も近いだろう。

おまけに、凄乃皇の資料まできたとなれば、ムアコック・レヒテ搭載型の戦術機も夢ではないな。

やる気が湧いてきた!!

「イヴ…その者達を丁重に扱ってやれ。次回の募集で、その者達に枠をあげろ」

「畏まりました」

ソ連では、研究者や戦術機の開発に携わっている者達を捕獲してBETA軍で働くか死ぬかを選ばせてあげよう。きっと、捕まった者達も私の優しさに感化されて、喜んでBETA軍で働いてくれるに違いない!!

数日後。

恐ロシア…じゃなかった、ソ連攻略作戦の見学に来ているレイアです。

国連北極海方面第6軍 ペトロパブロフスク・カムチャツキー基地にて。

指揮系統がボロボロの軍など、命という名の結束で結ばれたBETA軍にとって敵ではない。しかし流石、ソ連だけあって衛士の熟練度

は目を見張るものがあるが：それでも、我々の新動力搭載型の戦術機があるかぎり、我々の勝利は揺るがないがね。

「切り捨て!! 御免!!」

「俺達はBETA軍。戦争根絶を目差す者!! エクシア、目標を駆逐する」

おうおう、絶対調じゃないか。

やはり、動力源としてM型抗重力機関を搭載させただけの事はあるな。やはり、滞空可能というのは大きな強みだな。あまり、空を飛んでいると八チの巢にされかねないがな。

「絶対調だな 二人とも：どうだい人間をやめた気分は？」

「ご存じのとおり、M型抗重力機関搭載型の機体は人間には操る事が出来ない。なんでも、M機関から発生する重力場の影響で人間がその影響範囲に入ると内側からボン!! と爆発してしまうそうだ。

原作では、00ユニットの演算能力があった為 主人公が搭乗できたという設定だ。当然、私には00ユニットを作るだけの知識は無い。生憎と旧「あ号標的」にもその知識は無く、お手上げだった。

要するにだ：人間で乗れないなら人間を超える存在に乗ってもらえばいいのだと思い今に至ったのだ。筋肉、骨格、脳まですべてがBETA産の特殊は物を使っている。

「BETA軍に入ってから既に人間である事を捨てた身だ。いつもと何ら変わらん」

流石は、エリート軍人ハムの人だ…言う事が違うわ。

「俺も問題ない。だが…一つだけ言わせてもらおう」

「なんだい？」

どうせくだらない事なのだろうが聞いてあげようじゃないか。

「これは、犬耳で有ってキツネ耳じゃああああああああい!!」

「どこが違うの？」

「断じて違ああああああう」

ちなみに、刹那は本人経つての希望で耳を頭部に付けている。なんでも、愛玩用とお揃いにしたいそうだ。全く、変態の考える事は全く理解できん。

「じゃあ、ここの制圧戦でTOPスコア出したら無料で治してあげるよ」

「その言葉忘れるなよ!! 今日俺は、阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

あ…それハムの人のセリフ。

「それは、私のセリフなんだが…」

物凄い勢いで刹那が制圧戦中の基地へ飛び込んでいった。しかも、ラザフォード場まで発生させて敵の歩兵をミンチにしていやがる…えげつなーな。

「では、私もそろそろ行かせてもらおう」

「しっかり働いて来い」

私は、ハムを見送った。

「そうそう、可能な限り研究者は殺すなよ……ってもういないか」

数日後、レイアの私室にて。

『レイア様、合衆国政府より通信が入ってきております』

おろ？

珍しい所から通信が来ますね。

『繋げ』

『はい』

ディスプレイに合衆国政府の偉そうな人が映った。ソ連が落ちて次は我が身と思ったかな。いいだろう、話くらいは聞いてやろう。

14話：レンタルBETA

合衆国政府のお偉いさんと会話中のレイアです。

対話を始めて既に、三分が経過しようというのに相手が一方的に話してくる。次に標的はどこだとか、BETA軍の捕虜を開放するから進軍をやめるとか、イミフな事を行ってくる。攻める国なんて私の気分次第だ。

だが、その事を教える必要性は、全く感じない。いつ攻め込まれるかわからないから楽しいんじゃないか。

後、我が軍の捕虜など存在しない。相手に捕まった時点で我が軍の貴重な人員枠に空きが出来る事になるのだからね。

『このままくだらない事を言っていると今後通信は遮断するぞ』

『ま、待つてくれ!! 本題はこれからだ。決して悪い話じゃない、だから最後まで聞いてくれ…後、この対話はオフレコでお願いしたい』

気になるな。圧倒的優位にある我々に対して良い話を持ってきてくれるなんてね。しかも、オフレコと来た。

『よかるつ。これからの話はすべてオフレコだ（米国以外の各国に生放送しろ）』

『手間をとらせてすまない』

ニヤニヤ

合衆国のお偉いさんにはバレないように、脳内で命令を飛ばした。相手がこれからの話が世界中に聞かれるとなつては、尻込みしてしまうかもしれないからね。このくらいの配慮当たり前だ。それに…人類を殲滅しようとしている存在に交渉の余地などあるはずなかるうに。

しかも、相手がオフレコと言っくらだから　きっと誰にも邪魔されない場所で通信をしているはずだから、世界中に放送されていることなど知るのに時間がかかるだろう。ああ…楽しみだ。

『我々、合衆国が保有する全てのG弾及びあらゆる技術をBETA軍に受け渡す準備がある。かわりに、合衆国には不干涉とお願いしたい』

…え!?

あまりの弱腰に予想外だぜ。てっきり、徹底抗戦の構えがあるのか、実はG弾より強力な爆弾があるぜとか　そんな話を期待していたんだが。

『正直、魅力がない提案ですね。このまま、進軍していればいずれは手に入れられる技術です。我々にとって、それが多少遅かろうと早かろうと問題ではない。それに、他国を見捨てて自分だけ先に安全地帯に逃げようと言う魂胆が気に食いませんね。後、そんなこと他国が見過ごすはずありませんよ』

『ならば、合衆国全てとは言わん…5万人。それだけの人間をBETA軍の保護下において欲しい。後は、他国に悟られないように進軍をしてもらって構わない』

一気に、人員を減らしてきたな。それにしても5万人ね。確か、才

ルタネイタイプ5で逃げる合衆国の人員がそのくらいだった気がするな。

『なるほどなるほど、確かに五万人程度なら我々BETA軍が持っているワームを何匹か使えば一気に運び出せる人数だ』

『ならば、この取引で』だが、断る!!』』

相手の嬉しそうな顔が一気に絶望へと変わった。

きもちいー。

『最初にも言ったように、我々BETA軍の人員は1万人が上限だ。多少の例外はあるにせよ、五万人など到底受け入れられない。それに、既に情報が行っていると思うが：お前らのメンバーの一人が既にグレイ・ナインの資料を携えて亡命してきている。要するにだ：待っていれば、勝手に情報を携えて来てくれるんだよ。だから、こんな交渉など無意味!!』

『合衆国が保有する全てのG弾が、オリジナルハイクに向けて発射されることになるかもしれませんよ』

確かに、G弾は驚異だが：グレイナインの資料の中にG弾に関する資料も混ざっていてね：既に目を通していい。「あ号標的」を食っていなかったら書いてある内容なんて理解不能だった。だが、流石は宇宙生命体だ：あの資料を見ただけで既に対抗策が思いつくとはね。まだ、実践で試していないから不安は残るが恐らく問題なく対応できるだろう。

『くつくつく、楽しんでいますよ。では、ご健闘をお祈りしています』

『待ってくれ!! まだ話が…』

通信途中であつたが、切断した。

さて…次の準備取り掛かるうか。

『イヴ、今の会話は?』

『合衆国をのぞく世界各国に放映いたしました』

『よろしい。では、B E T Aの増産に取り掛れ』

イヴに命令を出した。これで、数日後には数万のB E T Aが誕生するだろう。

『今の放送を見てきたのだが、随分と楽しそうだな。それで、今更B E T Aを量産して何をするんだ?』

『グラハムか。なーに、合衆国相手に喧嘩を売れない弱小国にB E T Aの貸出さ。きっと、楽しくなるぞ』

自分たちを見捨てて逃げようとした大国に喧嘩をするチャンスあげようなんて、私はなんて慈悲深いのだろう。

数日後。

合衆国を除く各国にB E T Aの貸出を始めたレイアです。

しかし、ここにきて思わぬ問題が発生した。貸出申請が予想以上に少ない。いや、少ないというか…聞いた事ないような小国からわずか

に申請があつたくらいだ。

なぜだか理解できない。

貸出料金が問題なのだろうか……いや、そんな事はない。すごくリーズナブルなお値段だから、決してどの国も借りられないハズはない。

「兵士級と闘士級が人間二人。戦車級と光線級が人間三人。突撃級と要撃級と重光線級が人間五人。要塞級が人間五十人と大変お買い得はずだ。確かに、BETA軍相手には使用制限をかけてはいるが、無期限レンタルと大盤振る舞いなのだな。どうおもう、刹那、グラハム」

「BETAに耳が無いせいだと、俺は思う」

……君に聞いたのが間違いだよ 刹那。

「確かに、ここまでレンタル申請が来ないのは不可解だな。各国の意見を募ってみてはどうだ？」

よい提案だ グラハム。

「イヴ、至急各国にこの件を調査してこい」

「かしこまりました」

翌日。

「レイア様、先日の件調査結果が纏まりました」

『ずいぶん早いな。報告しろ』

さてさて、どんな回答がくるかな。やはり、貸し出すならばBETA軍の戦術機などを希望しているのかな。それとも、私自身をレンタル希望かな（笑）

『はい。まず、全体の8割が貸し出されるBETAに対しての不満です。次に多いのが人命をなんだと思っっているといった意見です。後は、聞くまでもないたわいもない物です』

やはり、レンタル可能なBETAが問題か……。しかたない、少しだけ制限を解除してやろうかな。

『その8割の連中は、なんのBETAを希望しているのだ？ 大体想像は付くが、一応聞いておこう』

『8割の意見の中の9割が愛玩用BETAの貸出を希望しております。要するに、私たちのようなBETAを貸し出して欲しいと……もし、貸してもらえるならば一体当たり500人の命を差し出すと言っている者達もおります』

あ、頭いて……。

なにそれ、もしかして負け戦だから人生最後くらいエロい事して終焉を迎えたいといった結論に至ったのか!? それに、こんな決断ができる権力者なら女なんて入れ食いだろ。それとも、人間の女には飽きたとかいうリア充なのか!?

だけど、そんなしょぼい人数では話にならんぞ。BETA軍内部だって、愛玩用BETAは高額商品だ。軍人を1万5千人KILLしないと手に入らないようなものだ。それをたかが500人と交換など有りない。

『その八割のアホどもに、愛玩用BETAが欲しければBETA軍が提供しているポイント表の三倍の人間を提供しろと伝えておけ』

『かしこまりました』

数日後。

『レイア様、今日までに愛玩等BETAの申請数が50を超えました。ちなみに、アメリカから国籍を変えてまで愛玩用BETAを手に入れようと画策しているものも居るみたいです』

……

……

…

こんなに簡単に人命を差し出してくるなんて…人類なんて、さっさと滅びてしまえ!!

人がせつかく量産したBETAではなく、愛玩用BETAをどういうことだ。お前ら、合衆国が憎くないのかよ!! 女の子とにやんにやんしている暇があったら、さっさと反逆しろ!!

ちゃんと仕事しろ!!

くっそ!!

しかし、宣伝してしまった手前 約束は守るレイアです。嘘をつくのは良くないからね。在庫になってしまったBETAたちには申し訳ないけど、各地のハイブへ送って防衛の仕事に付けてもらおう。

人間の欲望を甘く見ていたレイアであった。

15話：わらしべ長者

合衆国の某大農家にて。

「くっくく、まさか難民がこんな時に役に立つとは思ってもみなかったな」

我が一族は、長年にわたり合衆国の農産業を支えてきた。BETAが地球に現れるまでは、地位が低く見られる傾向があった。しかし、今では各国の首脳陣ですら俺に頭を下げるくらいだ。全く、良い時代になったものだ。

最近では、慈善事業として難民に対して食料の配給なども引き受けている。正直、なんの役にもならん連中に飯をくれてやるなど狂気の沙汰だったが、流石に、合衆国からの命令には逆らえん。あいつら、戦術機まで持ち出してきて首を縦に振らせてきたからな。

いくら、票を確保する為とはいえ やりすぎだろう。おかげで、俺が何をやっても黙認されているがな。人間食わなきゃ生きられんから、食料を餌に難民の女を食いまくっている。世界各国から難民が集まる合衆国のおかげで、俺が世界中の女を食べ放題だ。

しかし、流石に人間の女に飽きてきたと思った矢先に先日的事件だ。

BETA軍がBETAの貸出なんて冗談みたいなことをやり始めやがった。しかも、アホな合衆国の政治家の大暴露の後にだ。おかげで、政府は相当焦ったらしい。万が一、受け入れる国家があるならばG弾使用も考慮されたと聞いた。実際、いくつかの国がBETAをレンタルしたがG弾は発射されなかった。

恐らく、採算がとれないという理由だろうな。名も知らないような小国に貴重なG弾を使

う訳にはいかないだろうからな。

そんな話は置いておいてだ。

要するに俺は、合衆国にいる難民のほとんどを自由にできる権利があるんだ。そして、人間の女は抱き飽きた。ならば、導き出される答えは一つ!! BETA軍が扱っている商品に目が行くわけだ。

今までも何度か今の地位を持ちこしてBETA軍に所属して、二足の草鞋を履けないかと必死に考えたが無理だった。合衆国は、なんとか騙せてもBETA相手にはどうしてもアイディアが浮かばなかった。

書類上の国籍さえ変えてしまえば私は合衆国の人じゃないからセーフという裏ワザだ。

だが、今回の一件でその悩みも解消されたのだ。不要なモノを処理するだけで、私が欲しいモノが手に入るのだから、嬉しい限りだ。数十万いる難民の内たかが、数万消えようと問題では無い。それに、合衆国に足がつかない用意に色々と根回しも完璧だ。

「アルフォンス様、件の商品が届きました」

もう来たのか!!

難民キャンプの位置をBETAに提供してから、僅か二日で届けてくるとはな。執事の報告では、難民キャンプが突如巨大ワームに丸ごと飲み込まれたという話だが、私の知ったことでは無い。

「ちーす、三河屋です」

「ぶーー!!」

今、世界の話題の中心ともいえる「あ号標的」がそこにいた。人の顔をみて嘔き出すなど紳士としてあるまじき行為だが…これは流石に私が悪いはずがない。

いきなり、人類最大の敵が宅配をしているのだ…これが驚かずにいられるはずがない。

「愛玩用BETAお届けに参りました。ここにサインをお願い致します」

「ああ…印鑑が無いんでサインでもいいか？」

「もちろん」

……………思いのほか好意的だな。付き合い方さえ間違わなければ、なかなかいい相手ではないかと思ってしまった。

かきかき

「確かに…では、これからもご贔屓に」

「ああ、これからもよろしく頼むよ」

そういつて空の彼方へ飛んで行った。

「セバスチャン!! 分かっていると思うが、しばらくの間誰もこの屋

敷に通すなよ。例え、政府高官でもだ」

「もちろんでございます」

さあ、楽しい時間を始まりだ。

レイア私室にて。

希望者全てに愛玩用BETAを配り終えたレイアです。

「全く、世の中ゲスな人間が居るものだな。まさか、難民を餌にしてくるとはな」

……

……

…

私がぼやいていると、イヴが、何故か鏡を私に向けてきた。随分と人間味がでてきたじゃないか。

「どういう意味だ？」

「いえ、特には…」

「まあ、よい。それで手に入れた人間共に対して処置は行なっているのだうな？」

「もちろんです。既に、連れてきた人間の8割に処置を施しております。しかし、拒絶反応が強い為 半数以上者が死にました」

やはり、脳だけをBETAの体に移植するのは大変そうだな。せつ

かく自我をもったままBETAにしてあげようというアイデアが…。

「まあ、ある程度生き残ればよい…後、お前は用済みだ」

ドゴォー……ン

荷電粒子砲できれいさっぱり消滅させた。

私に対して不敬は、死を意味する。周りに人間が多いから少々性格に変化があったかもしれないが…出来損ないは破棄だ。兵器に感情などいらん。

16話：憎しみの連鎖

横浜基地にて。

あのバカが救ってくれた世界が、こつも簡単に滅んでいくとはね。正直、やってられないわ。

世界中の戦力を総動員して倒した『あ号標的』…。しかし、僅か一ヶ月程度で新たな『あ号標的』が現れた。しかも、以前とは異なり完全な人型として復活してきた。その容姿が淒乃皇の自爆に巻き込まれた人物だった。

「やっぱり、あの化け物を倒すにはアレに賭けるしかないわね」

荷電粒子砲を防ぐだけでなく、G弾の直撃を食らっても生き残った化け物なんて人類の手に余る。おまけに、今ではBETAの力まで手に入れて完全にお手上げだわ。もっとも、その化け物が人類殲滅をゲームのように楽しんでいるおかげで生き残れているも事実だ。まさに、不幸中の幸いというやつだわ。

「霞、準備はできているわね」

コクン

チャンスは、一回だけ。決して失敗する事は許されない。例え、成功したとしてもさらに状況が悪化するかもしれない。だけど、その時は諦めましょう。

装置の電源をいれた。

あの化け物を倒しうるナニかを呼び寄せるための作戦だ。あの馬鹿を元いた世界に送り届ける事が出来たのだから、別の世界にいるあの化け物を倒しうる何かを引き寄せる事も可能であるはず。それが、例えば砂漠でコンタクトを見つけ出す位の可能性であろうとも、必ず成功させる!!

神様なんて信じてないけど、今では神頼みしてあげるわ。

「なんでもいいわ!! あのレイアという化け者を倒せる誰でもいい!! この世界を救って頂戴」

「お願い、助けて」

.....

.....

...

機械音が響く。

「やっぱり、無理よね.....。戻るわよ 霞」

時間の無駄をしたわ。予想通りとはいえ、堪えるわね。

まずは、生き残ったアホな国家共を一致団結させないといけないわね。スタボロにされた国家間の信頼を取り戻すのは容易な事ではないが、少しでも人類を長生きさせる為には、やらねばならないわね。

「.....どうしたの霞。さっさと行くわよ」

「誰か来る」

誰かって…こんな場所に…まさか!?

その瞬間、部屋全体が眩しい光に包まれた。

光が収まると、まるで絵本から飛び出てきたかのような麗しい男女二人組と銀髪の美少女がいた。

「蛮族よ、先ほどレ、レイアさんの名前が聞こえたんですが、何処にいますか？」

「お母様、話がややこしくなるから黙ってなさい」

……

……

…

理解が追いつかない。

なんだか、よくわからない連中だが恐らくあのレイアとかいう人物の関係者なのだろう。予想以上に大物が釣れた事に危うく、我を忘れそうになった。

これで世界は、救われるわ!!

レイアの関係者にまともな人物が、いるはずも無く。例に漏れず、ここにいる三人もレイアと同類と考えなかったのは、失策であったと知る事になる。

香月先生の作戦が行われている同時刻、合衆国最前線にて。

「くそつたれが!! BETAは、基地制圧戦に参戦しないんじゃないのかよ」

「黙って、防衛に当たれ。あいつら、ただのBETAじゃねーぞ」

そんなの見たら分かる!!

BETAがオレら人間の武器を装備して攻めて来ているのだからな。

しかも、動きもやたら人間くさい上に戦術機の構造上の弱点を正確に狙ってきやがる。数こそ少ないが、そのやり口がえげつない。オレら人間の兵士を生きたまま盾にして距離を詰めてきやがる。おまけに、なかには人語を話してこちらの無線に割り込んでくる奴らもいる。

『CPより各位へ、 たった今BETA軍より回答があった』

オレらを殺そうとしている連中に問い合わせをしてマトモな回答が今だに返ってきているの事に俺は非常に疑問に思う。

『我々、BETA軍は合衆国に対して進軍を行なっていない。合衆国にいるBETAは、自ら御礼参りに行きたいと自主的に行動している連中だ。よって、我々は何も関与しない。煮るなり焼くなり好きにする』だそうです』

自主的にだと!?

本来BETAは『あ号標的』の支配下に置かれており、命令なくして動くことなどありえない。しかし、今回暴れているBETAどもは特別製だ。愛玩用BETAの代金として受け取った者の脳をBETAに移植して完成した新型だ。要するに、人間であった頃の自我を持つBETAの完成である。だが、この事を知る人類はまだいない。

『ザーザーザ…き、聞こえるか。合衆国の糞兵士ども』

「おい!! BETAの連中が通信網に割り込んできた。さっさと、見つけて始末しろ!!」

俺の家族は、先日謎の難民キャンプ消失事件で連絡がつかない。恐らくは、BETAに連れ去られたともっぱらの噂だ。騒ぐ連中には、愛玩用BETA欲しさに難民を売ったと言っている奴もいるが、俺は違うと信じている。難民の俺を受け入れてくれて、戦術機の兵士にまで育ててくれた合衆国がそんなことをするはずがない。

だから、俺は合衆国の為にもここを死守する!!

それが、家族を連れ去ったBETAへの復讐でもあり、合衆国への恩返しでもあるからだ!!

『我々は、この国に売られた者たちの末路だ。そして、BETAの手によつて脳をBETAに移植されこの場にいる。なぜ、我々がこのような目にあわなければならない!! 我々は、レイア様のご行為により自主的な行動を許されている』

な、なんだと!!

『前置きは、どうでもいい。我々が言いたいこと一つ!! 貴様ら皆殺しだあああああああ!!』

通信がきれた。

合衆国に売られた? 自我をもっている?

そんな事を言われても、どうしようもない。話し合いで分かり合えるはずがないな。BETAの親玉を様付していた時点で洗脳されているのは明白。しかも、本人たちは自覚なしだ。俺に元同胞を殺せっていうのか…家族がいるかもしれないのに。

『重光線級に狙われている!! 至急回避行動を取れ』

オペレータから緊急通信がはいった。

俺が放心している間に狙われていたようだ。とりあえず、回避行動を…

「さようなら、あなた」

え!!

私に狙いを定めているBETAから妻の声が聞こえた!!

「まってく…」

ドカーーーン

重光線級から放たれたレーザーによって私がいるコックピットが消滅した。

17話：別れと再会

今日もご機嫌のレイアです。

さーて、今日はどこの国を攻めようかな。日本と合衆国は最後に取っておくつもりだ。

世界地図に向かってダーツを投げた。

その地図は、既に全体の8割が真っ赤に塗られている。その塗られた箇所がBETA軍の制圧した国家になっている。そして、本日の獲物は…また聞いたことがない小国だ。

「アダム…この国の詳細なデータを」

「ただいま、お持ちいたします」

イブが消滅したので、再生産が完了するまでアダムを秘書にしている。決して、アーベのような趣味で男を近くに遣えさせているわけではない。

アーベ…久しぶりに名前を口に出したのだが、いい加減誰か迎えに来てくれないかな。それに、何だかんだでテファや娘たちがいないと寂しいです。

「レイア様、資料を持ってまいりました。それと横浜から通信が来ております。なんでも至急レイア様にお繋ぎして欲しいとの事です」

横浜と言えば…あの魔女が居る国か。

原作では、随分と頑張っていたが今では食糧難がピークに達しそうな極貧国だ。イナゴの働きと世界中のあらゆる分野での生産力低下に伴う影響をモロにうけているからな。

さて、どんなネタで私を楽しませてくれるかな。

「構わん繋げ」

今日は、ホットチャイか…旨いな。こういつ、贅沢が出来ない人たちが可哀想だ。そうだ、BETA軍の直営所を各国に作って、食料をポイントで交換できるようにしてあげようかな。これで食糧難に困る人々が減ること間違いなし!! きっと、救われた人々から感謝されること間違いないね。

『レイアさん、見つけました』

『ブーーーーーゴッホゴホゴホ』

予想の斜め上を行く展開で、飲んでいた紅茶が気管に入った。まさか、このような手で私を苦しめてくるとは…さすがは、横浜の魔女だ。

というか、なんでテファがここに!!

落ち着けレイア。もしかしたら、これは相手の罠かもしれない。こういう時こそ、落ち着くんだ。

『どつせ、敵の罠じゃないかとか 静まれ俺の右腕とか くだらない事を考えているに違い無いな』

『ビ、ビダーシャル!! なんで、ここにいるんだよ。ついでに勝手に人の思考を読むんじゃないよ。後、俺の右腕が!! とか全然考えてない

から』

『ちゃんと、乳酸菌とってる？お父様』

.....

.....

...

テファとビダーシャルと水銀燈…一体、人類が何をしたいか理解に悩むよ。私だけで飽き足らず、最凶の連中まで呼び寄せて…本当に何を考えているんだ。

『久しぶりだね。ちゃんと、ご飯は食べているかいテファ。紅茶（醤油）は、一日一リットルまでだよ…ちゃんと守っているかい水銀燈。いい加減、いい年なのだからいい人見つかったかいビダーシャル』

『はやく、レイアさんのご飯が食べたいです』

『一リットル？なんの話かしら…全く記憶にないわね』

『大丈夫だ、問題ない』

どうやら、みんな思ったより元気そうだな。もっと、私が居なかったことに悲しんで欲しかったよ。実際、一度はこの世界で死にかけたのだからさ。少しくらい、心配だったよとか言ってくれてもいいんじゃないかな。

三人の映像がいきなり切り替わった。

『そういう事よ。あの三人がどういった力を持っているかは知らないけど、今三人が居る部屋には、合衆国が所有しているG弾の半数が設

置されているわ。これがどういう事かわかるわよね？ 私たち人類は、あなたと交渉の場を設けることを望むわ』

交渉の場か…随分とハードを下げてきたな。人類を見逃せではなく、妥協点を探す方向に倒れたか。

まあ、全く信じていないけどね。

だって、G弾が出てくるってことは利権が大好きな合衆国や日本も一枚も二枚も絡んでいるってことでしょう。水銀燈だけなら、交渉の場に出たかもしれないが…ビダーシャルやテファがいる以上、G弾で死ぬことはありえないだろう。

だって、私よりチートだからね。

『だが、断る!!』

『あ、あんた自分の妻と娘、親友を見捨てるつもり!! 悪いけど、こっちは本気でG弾を使うつもりよ。G弾の威力は、あんたが身をもって経験しているはずだから一番分かっているでしょう!! 死ぬわよみんな』

はっはっはっはっは

『確かに、私のような中堅では生存率はかなり低いだろう。だが、君たちが接待している連中の内二人は、私より確実強いのだよ。だから、構わんよ』

あの三人の事だ。私がこの星に居る事さえわかれば位置を掴む事もできるだろう。恐らく、今はテファが飯に夢中の為、こちらに来ていないだけだろうな。人類側は、なけなしの天然物を大放出中ときて

いる…まったく苦勞なことだ。

では、私は三人の受け入れ準備と後片付けに入ろう。

『それでは、人類の皆さん　楽しい余生を…』

『まちな……』

通信を遮断した。

さて、立つ鳥　後を濁さずとあるし…残った連中も掃除しちやいまずかな。

後日、妻子と親友との再開をレイアです。

私の感が正しければ、もうすぐあの三人がここに来るはずだ。念の為、三人の襲来に備えてBETA軍全体に知らせは出している。下手に迎撃に当たられてもこちらの戦力が減るだけだからね。素直にお通ししろと…。

さて、ではゴミ掃除を始めますか。

『全てのBETAに通達する。サーチ&デストロイ!!　サーチ&デストロイ!!　人間を発見次第速やかに排除せよ。ハイブ周辺の人類をひとり残らず殲滅せよ』

制圧した国家の地下や山奥などには、まだ少ないが生き残りもいるだろう。そういった連中を含めて皆殺しである。そして、ハイブ周辺の掃除が完了次第、残りの国家を制圧する。

今頃は、我が軍が貸し出したBETA達も速やかに行動を実施して

いるはずだ。先程まで従順だったBETAが牙をむいてくるとは予想もしないだろう。

さて、次の仕事に取り掛かるか。

「アダム、全BETA軍兵士に通達をだせ。今すぐ、『旧あ号標的』があつた場所に全員集合しろと。従わない場合は、排除して構わん」

「かしこまりました。直ちに実行いたします」

BETA軍兵士よ…悪いが、仕事がなくなる以上 解雇だ。今まで、ほかの連中と比較して充実した日々を遅れたのだから悪く思わないでくれよ。

それに、最初から明言しているように…人類の殲滅こそが目的だ。その中には、当然お前らも含まれているのだよ。

「それと科学者達は、脳を摘出しておけ。後から知識だけ吸い出す」

「かしこまりました」

BETA軍には、人間を脳だけの状態で生存させる技術があるのは本当にありがたいわ。これで、星に帰ってからG弾の研究などが続けられるのだからね。

旧あ号標的が居た大層間にて。

「諸君、私は後数日で元いた星に帰る事になるだろう。よって、本日をもってBETA軍を解散とする。本日までよく働いてくれた」

ザワザワ

集まった人々から騒ぎ出した。

「我々は、どうなるのだ？」

良い質問だハムの人。

「みんな仲良く死んでもらう。当然、今まで働いてきた労をねぎらい、希望する死に方であの世に送ってやろう。むろん、歯向かってきてくれても構わんよ。手間が省けるから、是非とも歯向かってきてくれ」

大広間を囲むように重光線級のBETAが現れた。

「な…なんだと!!」

「ふざけるな――」

「なんでもするから、助けてくれ」

………

………

…

命乞いをする連中は、どういつ神経をしているのだ。そう言ってBETA軍に助けを懇願してきた連中を無慈悲に殺してきたのだろう。

その報いを受けるのは、至極当然。

「ならば、俺は腹上死を希望する!!」

大胆不敵に刹那が一声を挙げた。しかも、その願いは実に男らしい

物でこのレイア感服いたしました。

「許可しよう。特別に、既に生産済みの愛玩用BETAを好きなだけ連れていって構わない。他には誰もいないか？数に限りがあるぞ!!」

「俺もだ!!」

「俺も腹上死で死にたいぞ!!」

「私も!!」

刹那に賛同するように次々と志願者が出てきた。中には女性も居たが…腹上死って女性にも適用される死に方だっけな。良く分からんが、問題ないか。

グラハムと刹那が部屋を退場していくのが見えた。

「グラハム 刹那。 私が憎いか？」

「全く、むしろ感謝しているくらいだ。短い間だったが同胞にあえて楽しい時間だった。さらばだ 友よ」

「完全に同意。 また、来世で会おう」

「ああ、私も楽しかったよ。さらばだ 友よ」

同郷の者に別れを告げた。

十数分後。

「ほかの連中はいいのか？最後まで欲望に埋もれて死にたい奴はお

らんのか？至高の快楽を約束するぞ」

しばらくすると、広間から人気がなくなった。みんな思い思いの愛玩用BETAを連れて最後の一時を楽しんでいるようだ。残った連中には、このレイア自らが安楽死をさせてやろう。トキより授かった北斗有情拳でほうむってくれよ。

「最後まで良く私に尽くしてくれた。安心してあの世に行くが良い!! 北斗有情拳!!」

快楽の中死んでいく者たちの断末魔が聞こえた。

これにてBETA軍は、消滅した。

レイア私室にて。

フンフンー

私の勘では、テファ達が後数分でここくると告げている。私は皆を迎える為に料理中だ。

みんな、喜んでくれるだろうか。私の腕は落ちていないだろうか。そう言った不安は、あるが…今はみんなと食事ができる事が楽しみで仕方がない。

コンコン

部屋の扉がノックされた。

どつやら、我愛妻のご到着のようだ。

「おかえり、テファ、水銀燈。後：おまけでビダーシャル」

「えへへ、ただいまです レイアさん〜」

おっと、テファが飛びついてきた。

相変わらず、私のテファは可愛いな。頭をナデナデすると、まるで子犬のように喜ぶんだよね。やっぱり、私はテファが大好きだ。

「あら、お父様私には何もないの？」

はいはい、醤油を浴びるほど飲ませてあげよ。可愛いBETAたちが作った商品が沢山あるからね。

「探すのにどれだけ苦労したと思っている。全く、未来の事がなければ…ブツブツ」

なにやら、イミフな事をビダーシャルがつぶやいている。

「すまなかったね。後、みんな ありがとうね」

「レイアさんの為なら火の中水の中です!!」

テファが元気に返事をするが…私がこんな場所にいるのは、君のせいなのだが（汗）とは、空気が読める私はそんなことは居ない。

最終話：掃除

気が付けば大分時間が経過した気がするが気のせいだろうと思うレイアです。

ビダーシャルとテファ、水銀燈と合流し美味しくお食事をさせていただきました。そして、私が居なくなってからのお出来事をいろいろ聞かされて若干…いや、本気で顔が青ざめてしまった。

まさか、私が居ない時にテファが『レイアさんがいないうちに料理のお勉強です』とか言い出して、台所を占拠していたとは。しかも、試食としてテファに強制召喚されたエルフ達で死体の山を作り上げたり…テレポートの応用で料理だけ相手の胃袋に転移させてテロを行っていたとは本当に申し訳ない。最終的にビダーシャルが生贄になることで終止符を打った模様だが…エルフの方々に計り知れない迷惑をかけてしまったともうわけない気持ちでいっぱいです。

「で、これからレイアはどうするんだ？ 無論、帰るにしてもタダで帰るわけでもあるまい」

「もちろんだとも、事故に近いとはいえ私を死ぬ直前まで危険にさらされたのだ。それに、テファの力で容姿のみを復元したから良かったが、今回の御代はきっちり払ってもらいますよ」

そう、テファの力により私は元の姿を取り戻したのだ。無論、「あ号標的」としての能力を維持したままでね!!

「どんな姿になっても私はレイアさんが大好きですから、問題ありません」

「ありがとうテファ。私も大好きだよ」

.....

.....

...

ビダーシャルから生暖かい視線が突き刺さるが…問題ない。所詮、独身者の僻みというやつだ。それにしても、ビダーシャルには女の気配の一つすら感じないのは改めてなぜだろうと思ってしまふ。頭脳、容姿、家柄、能力、地位とどれをとってもこの上ないほど上位に位置するというのは…性格に問題があるのだろうか。もしくは、特殊な性癖でもあるのだろうかと疑ってしまいたくもなる。

「今、とてつもなく失礼な考えをしなかったか？」

す、鋭い。

「うん!! でも教えない。…で、話を戻すけどね。帰る前に、この星を掃除しないとイケないと思うのよ。飛ぶ鳥跡を濁さずって言うじゃない」

「この星の連中程度を滅ぼすなど、今のレイアなら苦勞などしないだろう。それをわざわざ確認してくるということは…何が欲しいんだ？」

「流石ビダーシャル!! 話が分かるね…お勧めの玩具を貸してよ」

ビダーシャルの事だ。きっと、何か面白いものを持っているはず。某未来の猫型ロボットみたいはどこからか持ってきてくれる。

「あ、ビダーシャルさん。以前にアーベさんとミチシタさんにテスト

してもらったあの玩具がいいです!!」

突然、テファが話に割り込んできた。

……アーベとミチシタがテストした玩具だと!! とうか、私が思っている玩具と別方向の玩具じゃないよね。いやいやいや、仮に【大人の】とつく玩具だった場合にその状況をテファが知っていること自体おかしい。

だ、旦那がない隙に……とか展開などないと信じたい。テファに限ってそんな事ありえない。……もし、そうだったらビダーシャルを殺して俺も死のう。

まずは、上位エルフであるビダーシャルを殺すのは並大抵の手段では不可能だ。搦め手で行くしかないな。

「安心しろレイア。玩具というのは……」

……

……

…

ビダーシャルから玩具とは何かというネタばらしをされて一安心

!!

とうか、なんて代物を作ってくれるんだエルフは!! 時代を先取りしすぎだろう…常識的に考えて。

早急にアダムに全世界へメッセージを発信すべく準備をした。

『全世界のみなさん、今代の「あ号標的」である私ことレイアは、この

たびお迎えが来たので星に帰ろうと思います』

その瞬間、世界各地の様子を映し出しているテレビ画像から歓喜の雄叫びが上がった。

『だけど、今までお世話になった人類の方々に何の挨拶もしないで帰るのは申し訳ないと思う…本日から二週間後、生き残った国々を回りお礼ま…挨拶をして回ろうと思います。ちなみに、アメリカから回るので可能な限り戦力を集めておくことをお勧めしますよ。挨拶に行くのは私と妻のテファだけなので…撃退できれば人類の勝利です』

まあ、万が一にも死んだとしても即座に蘇生されるから撃退とか不可能なのだけだね。おまけに、私が居なくなっただとは後任の『あ号標的』が月からくる手はずになっている。当然、後任の『あ号標的』は私のような遊び心を持っていないので人類殲滅に専念するだろう。

そんなことまで教えてあげないけどね!!

『では、人類のみなさん二週間後にアメリカの大地で!!』

後日、各国にアメリカへの上陸ポイントを提示した。それから、生き残りの国から動ける戦力がすべて終結されていた。まさに、人類の思いが一つになった瞬間である。最初から、これほど上手に連携出来ていればBETA被害もかなり抑えられただろうと少し思うレイアであった。

二週間後、BETA本拠地のレイア私室にて。

レイアから指定されたポイントに軍人、兵器、報道カメラなどあらゆるものが集まっていた。人類の存亡をかけた最終決戦等だけあつ

て、場の雰囲気はとてつもなく張りつめていた。

「しかし、私が指定したポイントに来なかった場合とか一切考えてないよね。まあ、嘘をつく気はサラサラ無いけどさ」

報道カメラの映像を眺めつつ、予定時間になるまで自室でテファとお茶を飲んでいた。…無論、アメリカからはるか遠くにあるBETAの本拠地の自室で!!

予定時刻の五分钟前か…

「ビダーシャル…準備のほうは？」

「誰に物を言っているのだ？一週間もあつたのだ、準備には十二分の時間だ」

「ですよね。では、テファと少し遊んでくるわ…いくよテファ」

「はい!!」

それにしても、テファがプラグシートを着ると本当に悩ましいね。神々しいプロポーションがはつきりと出るしね。まあ、依然と違ってテスト用とは異なり露出は少ないから許せるけどね!!

さて、新型の性能を見せてもらおうか。

「エントリー!!」

ダブルエントリーシステムを採用されたビダーシャル謹製の最新型だ。なんでも、アーベとミチシタが乗った場合は、ビダーシャルのサイバディにも匹敵する性能を出したとか恐ろしい物だ。まあ、あの

二人の場合は普通に生身で戦ったほうが強いんだけどね…

では、虚無の【テレポート】で移動させてもらおうか。

ブーーン

アメリカの某地点にて。

「ふむ…予定ポイントに到着だな」

あの距離を一瞬で移動できるとか本当に便利だわ。『あ号標的』の頭脳を用いて同じことを再現できないか今度研究してみよう。使徒でも似たようなことをやっていた敵もいたから組み合わせればきつと不可能ではないはずだ。

『て、敵襲　　!!』

周りを見る限り、空を飛んできるとか地中を移動してくるとかそんなことを考えていたようで、突如移動してきた私たちにかなり驚いているようだ。

私とテファがあいさつをするためにエントリープラグから顔を出そうと思った瞬間…四方よりスコールのごとく弾丸が飛んできた。

ピタピタピタピタ

A・Tフィールドを使うまでもなく、飛来してきた弾丸をすべての弾道と威力を計算し威力を殺し、空中で停止させた。コモンマジックのちよつとした応用なのだが…この世界の人間から見れば摩訶不思議な現象に見えるだろう。自らが放った弾丸が目標にあたる直前で時間が止まってしまったかのごとく停止しているのだからね。

「何事も挨拶が大事だと私は思うのだけど…どうやら、相手は違うつみたいだね。まったく、酷いよねテファ」

「見てくださいレイアさん…あっちにも沢山ロボットがいますよ」

………

……

…

聞いてなかった。まあ、挨拶があろうとなかろうとやることは同じだ…では、さようならだ人類!!

手始めに、弾丸を元あった場所にお返ししよう…某ロリータお得意のベクトル操作じゃないが、真似事はできるぞ。

ズドドドドド

ちょっと、おまけをして飛んできた速度に二倍の速さでお返してあげた。…これぞ倍返しだ!!

『しねえええええ!!』

戦術機部隊の猛攻撃が始まった。

動きから察するにおそらくエース級の実力だろう。得意の獲物を手にすさまじい速度で距離を縮めてきた。それにしても…死ねってひどくない。私がまるでひどいことをした悪人に思われるじゃないか。

人類が長生きするために様々な施策を検討していたというのに

…その思いが伝わっていなかったなんて絶望した!!

「テファやれるかい？」

「任せてください…でも、上から降ってきているアレは放って置いていいんですか？」

私より操縦のうまいテファに遊ばせようと思ったが…テファの指摘で初めてはるか上空から飛来してくる物体を認識した。

米軍がひそかに開発していた「神の杖」…衛星軌道上から地表めがけてマツハ20で特殊合金を落下させるだけの極めてシンプルな兵器。だが、その威力は核兵器にも匹敵する…貫通力の面で言えば核兵器以上である。本来の用途は、衛星軌道上からハイクを破壊するためには作られた兵器だが…その初めての運用が味方を巻き添えにして私を葬るために利用されるとはね。

「おそらく、末端の兵士達には知らされていないんだろうね…テファ、受け止めるよ。できるかい？」

「そのくらい朝飯前です」

マツハ20の飛来物を朝飯前でキャッチできる事自体がすでに異常だと思うのだが…エルフにとっては朝飯前なのだろう。ちなみに…私は、BETAを取り込む前ではそんな芸当は無理だ。A・Tフィールドで防ぐ等の芸当はできるが、受け取るなどムリゲーだよ。

「では、私はこのビットもどきをつかって戦術機のお相手をしましうか…さてさて、原作とは異なり50個近くあるビットを防ぎきれるかね…」

行けファンネル!!

その瞬間、新型エヴァに搭載された50個のビットが一斉に飛び出し戦術機に襲い掛かった。このビット…私がエヴァ本体に搭乗していることによりA・Tフィールドすら発生させることが可能であり、A・Tフィールドを纏い高速で縦横無尽に飛び交うビットを戦術機で回避するすべなど存在しなかった。人類の英知の結晶ともいえる戦術機がまるで紙屑のように瞬く間にズタボロになっていく様子を見ると心がスウィートした。

人類を使ってお互い殺し合わせるのも楽しかったが、やはり自分の手で恨みを果たすほうがすっきりするな。

ズドゥーン

鈍い音がしたと思ったら、エヴァの両手…そして、内蔵されたもう2本の腕の計四本の手それぞれ金属体が握られていた。周囲への被害がないことから落下による衝撃はテファの能力で「無かった事」にされたのだろう。

「ちゃんとキャッチできましたよ!!」

「えらいねテファ…じゃあ、それを元あった場所にお返ししようか…錬金!!」

メキメキメキ

つかんだ金属を一つにまとめて…一本の槍を作り上げた。若干、材料が足りなかったたのでそこらへんに散らばっていた戦術機の残骸を利用した。我ながら実に良い出来だ…以前、野球とは名ばかりのイカレタ競技で私の胸を貫いたロングヌスの槍を作り上げた。無論デザ

インだけだね!!

「では、テファ……元あった場所に返して差し上げましょう」

「了解です。……………えい!!」

ズドゥーン

立った半歩の助走での投擲……しかし、飛来してきた速度とほぼ同等のマッハ20で目標へ一直線である。

……………軽いのもりで元あった場所に返そうといったのだが、マジで命中させるのかよ。

これで無粋な邪魔をする物はなくなった。

「では、掃除を始めようか」

その後……わずか一日で米国という国が事実上滅んだ。生き残っていた国家も順番に帆掃除されていき、レイア参戦からわずか三日でほぼすべての国家が機能なくなり、三日目の夜にレイアは懐かしの故郷へと帰還したが、四日目になり月から新たな「あ号標的」が地球に來たため、事実上人類は滅亡した。

レイアの束の間の冒険はこれにて終了となった。